
銃声の果てに・・・

優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃声の果てに・・・

【Nコード】

N0174Y

【作者名】

優太

【あらすじ】

生物兵器により日本政府の機能は完全に喪失した。
全世界に広がっていく絶望の中、最後まで諦めず戦い続けた人々の軌跡

注1：便宜上（奴ら・感染者若しくは、ゾンビ）と表記しては居ますが二次小説ではありません。

注2：出来るだけ注意はしているのですが作品の展開上他の作家の

方の描写と似てしまう可能性がありますのでその点については見な
かったことにしてください（殴

注3：実在の地名・大勢の死者が出ます。 嫌悪感を覚える方はブ
ラウザバックをお勧めします。

終焉の始まり

・・・ザザ・・・ザ「誰か生存者は居ないか？・・・繰り返す、誰か生存者は居ないか？」・・・

・・・「クソツ、誰も応答しない…どうなってるんだ・・・」

俺たちは、現在生存者を搜索し携帯無線機へ生存者の応答が無いか注意しながら自らの職場へと向かっていた。

その隣に居た秀夫がハンドサインで敵を確認と指示してきたので双眼鏡で周辺を確認すると（奴ら）が見えた。

双眼鏡に内蔵されているレーザー距離計は数値が安定しなく故障してしまっただようだ。

400mほど離れてはいるが出来るだけ交戦はしたくないので迂回していきこうと秀夫にハンドサインを送った。

――数分後――

「誰か職場に生存者が残っていると思うか？」

その問いに秀夫が答えた。「おい、そんなことを聞いて全滅していたらどうするんだw」

「まあその時はその時だろう相棒。」（無線に応答しない時点でおかしい。）と内思いつつも二人は市街地を前進していった。

――約2日前中国のとある軍事施設にて・・・――
10:00

軍事施設内に一台の四輪駆動車が入って行った。

軍事施設内の研究所内の一室で白衣を着た研究員達と人民解放軍の将校達（と言っても内密に進めていた計画の為2人しか居ない）が集まっていた。

研究所の一室は階級章を無駄に多く付けた将校の煙草の煙で息苦しい状態だったが研究員達は何とか耐えていた。

将校 「強化兵プロジェクトの進行状況はどうだ？」

研究員 「順調に進行しています。指示のあった通り西側諸国の使用している5.56×45mm弾程度では痛みを感じないレベルまでは順調にいておりますが・・・しかし・・・」

将校 「どうしたのだね？」

研究員 「それが…動物実験ではこの薬を使用した個体は各神経全般が衰退してしまい・・・」

将校 「いつまでそんな言い訳を続ける気だ!!」

そういうと将校は腰に取り付けた革製のホルスターからQSZ-92を抜くと研究員に向かってこう吠えた

「私がどれだけのリスクを冒してまで国家の為にこの計画を進めてきたと思っている？」国の為と言ってもはいるが実際は自分の昇進の事しか考えていない。そして上層部の許可は得ていない。

研究員 「ぶ、プロジェクトはあと二年で完成しま「何だと貴様まだ二年もかかるというのか!？」そういうと将校は研究員のすれすれの位置に発砲した…」

研究員 「わ、私が死んだら誰が研究を引き継ぐんだ？」

将校 「安心しろ、お前ら研究員の代わりなんかいくらでも居る。」研究員は死の恐怖と激しい怒りを覚えた。

研究員 （覚えていろ絶対にこんな施設から居なくなってる）

士官 「中佐、会議の時間が迫っております。」将校は中佐だったようだ。

将校 「分かった。後でこの件について（研究員を睨み付けながら）
ゆっくり話そうじゃないか。」

研究員達が敬礼をして将校たちは引き上げていった。

研究員 （この薬の開発に成功すれば苦痛を全く感じず指示にのみ
従う優秀な兵士が作れる・・・これをブラックマーケットに流せば・
・・・）この男も自分の利益しか考えていない。

プレゼンテーションが終了して研究員達は自分たちの部署へ引き返
して行った。

研究員 （今夜ついにあの計画を実行に移すか…）

―― 同研究所にて ―

23:30

研究所内であの男自分の研究室から薬の入ったアンプルを盗み闇へ
と消えていった。

―― 翌朝 研究所内にて ―

08:30

研究所内に昨日の将校たちが顔色を変えて飛び込んで来た。

将校 「何があった!？」

衛兵 「そ、それが…主任があサンプルを持ち出して逃走したよ
うなんです…」

将校 「何だと!？ 今すぐに奴を捕えるんだ!！」

士官 「りよ、了解！ 今すぐに包囲網を敷きます。」

―― 同時刻 北京首都国際空港にて ―

研究員 （アメリカ国内に潜伏しているテロリストどもにこれをう

まく売りつけることが出来れば俺は一気に大金持ちでこんな国ともおさらばだ！)

アナウンス 「間もなくアメリカニューヨーク行きの便が出発します。まだ搭乗以内方はされていないお客様は搭乗ゲートへ速やかにお越しください。」

” New York flights to depart soon. If you have not boarded yet you are not, please come to the gate immediately.”

研究員は無事にアメリカ行きのに搭乗し旅客機は高度約1万3000mの地点を飛行し13時間20分のフライトを終えると思い眠りについた。

その際に薬の入ったアンプルが割れてしまったことにも気づかずに・

その直後研究員は何もわからないまま永遠の眠りについた。

――2時間後――

旅客機内の生物に異変が起こりだした。

一番最初に起こった異変は、研究員のそばに居た乗務員だった。

突然の眩暈と共に意識を失った。

周りの乗客達は、貧血かと思った。

だが実際には、それに加え各種神経器官の急速な低下が起こり(奴ら)になった。

乗務員はすぐそばに来ていた医者 of 男の首元に咬み付きその男は絶命した。

そしてその男は何事も無かったかのように立ち上がると噛み付いて

きた乗務員と共にと他の乗客の方へと向かっていき機内は2分もかからずパニック状態へと陥った。

―そして数分後―

旅客機内に生存していると呼べる存在は誰も居なくなった。

機体を操縦するべき機長達もだ・・・

そして機体は日本の首都東京近郊へと墜落していった。

終焉の始まり（後書き）

薬品となっ ています が、 実際は生物兵器と言っ た方が正しいもの
です。

伝染

10:45

旅客機が東京近郊の工業団地に墜落

すぐに消防などが墜落地点へと急行したが旅客機は大破し炎上していたの（ジェット燃料の燃焼温度は約1200℃）で生存者の存在は絶望的だと思われた。

しかし、生存者ではなく奴らはまだしぶとく生き残っていた。

「誰か生存者は居ませんか!？」

「いたら返事をしてください!」

消防隊が必死になって生存者を搜索してはいたものの殆どは原型を留めておらず焦げ付いた何かになっていた。

しかし、ある一人の隊員が視界のなかの瓦礫の中で動くものを見つけた。

「生存者がいたぞ!!」

この一声で周りの消防隊員が駆け寄ってきて要救助者を救助しようと周りの骨組みを解体し救出した。

瓦礫の中から出てきたのは少女だった。

すると次の瞬間近くにいた隊員に噛み付いた・・・

「うわ何をする、いてえこいつ噛み付いてきやがった!!だ、誰か助けてくれ!」咬まれた男は悲鳴に近い声を出しながら言った。

周りの消防隊員達は何が起こったのか理解することが出来なかった。

「何をしているんだ、そいつを早く引き剥がせ！」と駆け寄ってきた隊員が言った。

周りの消防隊員がようやく正気を取り戻すところには噛み付かれた男の皮膚が抉り取られていた。

「ははは早くそいつを取り押さえろ！」

別の男がそう言っている間に旅客機の周りのあちらこちらから（奴ら）が這い出てきた。

その間に、消防隊の殆どが（奴ら）となり

「お、おいどうなっているんだ！？誰でもいい答えてくれ！」

「知るか！そんなことよりも噛み付かれたあいつを担いで早く逃げるぞー！！」

「りよ了解！」

そして墜落地点から200m程離れてから異変が起こった。

咬まれた消防隊員が担いでくれていた筈の消防隊員の首を噛み切った・・・

「こ・・・こっちに来るな！来るんじゃない！た、頼む助けてくれ！」

瓦礫の撤去用に持っていたバールを振り回し少しは数を減らしてはいたが（奴ら）の返り血で落としてしまい消防隊の最後の生存者は仲間だった筈のなにかによって殺され（奴ら）の仲間入りを果たした。

そして（奴ら）は市街地へと向かって行った。

12:50

――とある企業の敷地内にて――

敷地内のスปีカーから

「只今より模擬戦を開始します。」

とアナウンスが流れた。

開始の合図とともにOCP迷彩服を着た集団と迷彩服3型を着た陸上自衛隊の部隊（両チーム合わせて480人）が模擬戦を開始した。戦闘を行っている訓練施設は管理施設を含め約50000?もの広さを誇り現在はその敷地内でも約半分もの屋外の訓練フィールドで訓練を行っている。

但し、陸上自衛隊側の装備が89式小銃ではなくH&K製のHK416を装備しており通常の部隊とは異なることが分かる。

とはいえってもACU迷彩を着た方の装備は銃弾の口径こそ統一化されているものの隊員によつて全く違う装備をしている者がいる。

代表的なのが M110 sniper weapon system を装備していて更にリースーツで周囲から見ても殆ど分からないレベルで周辺の森林に溶け込んでいる男の存在だ。

「まさか、俺らみたいなのが『陸上自衛隊 中央即応連隊 特殊作戦群』と模擬戦をすることになるとはなあ・・・勝てると思うか相棒?」↑ 一応本作の主人公 狙撃手 ちなみに基本的な一人称の視点

「特殊作戦群の本気か? いいぞかかってこい!!」こいつは俺の相棒で「佐藤 秀夫」まあどんな奴か説明すると半自宅警備員だ（兵士と言った方が合う気がするが気のせいだ）。一応戦闘時には真面目にやる。

そんな事を言っている間に訓練場の至る所で銃声が鳴り始めた。

模擬戦（前書き）

主人公の戦闘が非常に短いです。

模擬戦

そしてフィールドは静かな森から急激に激戦地へと変化していった。主人公側の所属しているチームは、Japan military instructors Companyと言う企業で主に法執行機関に対して様々な戦術的な技術指導を請け負っているPMSCsだ。

因みに今回の模擬戦では、実銃を使用しているが使用弾薬は、シミュレーションSIMULATION FX弾とUTM弾でFX弾は、先端がプラスチックの外装に着色液が入っているペイント弾で軟質プラスチックにミゾが切っており、安全に潰れる（但し刺さる）。UMT弾は、弾頭は、硬質プラスチックで内部に金属ボールが入っている。威力が強過ぎるのが難点だが狙撃手が使用するにはFX弾では弾道直進性が低すぎるのでこちらを使用。

と言う訳で訓練時に狙撃手は相手から嫌わていれる。

今回の模擬戦で使用されている銃器は、

Japan Military Instructors Company 側 基本的にはアメリカ陸軍装備を使用

・M4 (Mk 18 Mod 0) (FX弾使用)

・H&K HK416 (FX弾使用)

・MP5F (強装弾仕様) (FX弾使用)

・M26 MASS (ゴム弾使用)

・ベネリM3 (ゴム弾使用)

・M110 sniper weapon system (UT

M弾使用)

拳銃は各自の自由だが多くのインストラクターは

・SIGSAUER GSR (FX弾使用)

・ F N F i v e - s e v e n (F X 弾使用)
を使用 主人公は、 P 2 2 6 C o m b a t T B を使用

自衛隊側

・ 8 9 式小銃 (F X 弾使用)
・ H & a m p ; K H K 4 1 6 (F X 弾使用)
・ H & a m p ; K U S P (F X 弾使用)
・ P 2 2 0 (F X 弾使用)
・ M 8 7 0 (ゴム弾使用)
・ M 2 4 s n i p e r w e a p o n s y s t e m (U T M
弾使用)

今回参加している編成は、 J a p a n M i l i t a r y I n s t r u c t o r s C o m p a n y 側と 特殊作戦群 側 双方 2 4 0 名 一個中隊と言う模擬戦にはかなり大規模な戦闘である。

基本的に、車両は原則使用禁止だが U A V は使用可になっている。

説明は、以上にして先程の戦闘に戻る。

俺たち狙撃班 (E a g l e - 1) は、通常の分隊 (8 ～ 1 0 名) よりも自分を中心とした小規模な班で 4 人で行動している。

雑木林の中スポッティングスコープを覗いている秀夫がこちらに対し「敵歩兵部隊 方向 3 時 7 6 0 M 先」と言ってきたので俺は「了解」と返答しながら狙撃銃のコッキングハンドルを引き、スコープの調子を確認してセーフティをセミオートポジションへ移動させる。

そして指令部に対し俺が、「こちらイーグル - 1 目標を確認 発砲許可を」と求めると

「了解したイーグル-1 良い狩りを。」
「了解 通信アウト。」

そして俺は、隣で狙撃姿勢を取っている班員に対し、

「もし俺が初弾を外した場合は迅速に撃て。」

「了解。・・・班長が初弾を外す事ってあり得るんですか？」

「俺を何だと思っっているんだ？」

「完璧な殺人兵器。」と隣の班員が言った

「・・・後で話し合いが必要なようだな。」

「えっ」

それを聞いて隣の秀夫が爆笑している。

そして敵歩兵部隊がキルゾーンへと侵入した。

司令部から通信機で指示を受けていると思われる自衛官にレティクルを弾道降下分を考えながら重ねて、通信を終了した瞬間に俺はトリガーを引いた。

トリガーを引いて数 μ sで撃針が雷管を叩き推進薬が薬莢内で炸裂し高温のガスがUMT弾を押して行き発射ガスによる音はサプレッサーにより殆ど聞こえなくなった。（通常弾よりも遅く亜音速だった為）

発射された弾丸は、272・232m/sで飛翔し自衛官が被っていたヘルメットを貫通しなかった・・・（訓練弾の為）

そして、自衛官達が伏せたが狙撃手二人によってこの歩兵部隊は全滅した。

その後、敵部隊に数で負けている味方部隊の掩護へ行き最終的に今回の戦闘で俺のスコアは35キルとなった。

今回の模擬戦の結果は、自衛隊の死者が210名 となり敵司令

部が作戦中止とした為こちら側の勝利として終わった。

対するこちら側の死傷者数は 死者 163名 負傷者 28名とこちら側も相当な被害を受けた。

自衛隊側からすると民間企業に負けたことが相当悔しいだろうがこちら側としても死者が出たことに対して満足のいくような結果ではなかった。

模擬戦（後書き）

出来れば感想をお願いします。

感想が来ないと作者が折れますw

自衛官との交流

模擬戦が終了し終了セレモニーで各小隊長達が発言した後自衛官達との交流会で各班長と挨拶をしている際にある自衛隊の班長が

「にしても誰の指揮だったんだ？あの開始数分で俺たちの分隊を全滅させた凄腕の狙撃班は？」と言うと

他の班の兵士も「一人やられたと思って伏せようとしたらたった15秒で全滅なんて・・・」

「まさか、そんな奴居る訳無いだろw」という話をしていたので軽くその場から立ち去ろうとして後ろを振り向くと秀夫が居て顔がやけににやついている。

嫌な予感がしたので全速力で逃げようとしたら秀夫が

「ああそいつなら今全力でこの場から逃げようとしているあいつだよ。」

・・・逃げようとしている時にもろ言いやがって

・・・って自衛官の方々がこっちに迫って来ているんですけど。

…とても怖いんですが

俺の班ついて話をしていた自衛官の方々の中でも一番上官が

「なあ、ちよつとあつちで俺たちの小隊と腕を競おうじゃないか。」

・・・嫌な予感が的中しました。

こんなところで死にたくないと言う訳で、何としても拒否しようとして少し抵抗したら完全に掴まれて自衛官に引きずられていく周りから見るとシニールな光景が出来ました。

秀夫

「ざまあwww」

隣に居た自衛官 「あ、はい了解しました。 あなたも来てください。」

秀夫 「・・・えっ？」

ガタッ（席から立ち上がる音）↓ダッ（秀夫が駆け出す音）↓スッ（特殊作戦群の兵士がテーブルの上にあったナイフを投げる音）↓ザクッ（秀夫の靴底と床に刺さった音）↓バシッ（秀夫が投げられた音）↓ズズズ（主人公と同じ状態になっている音）

秀夫 「どうしてこうなった。」

俺 「お前の所為だ。」

・・・見覚えのある顔がある。

和哉 「あ、班長お疲れ様です。」

俺 「何故ここに居るw」

和哉 「秀夫の所為です。」

秀夫 「一応上官なのに呼び捨て！？何のさb グハッ」

鈴羽 「はい黙ってください。」 ↑ 怖いのでGSRのマガジン底部で殴らないでください。

・・・どうやら被害者は俺だけではないようだ。

因みに和哉は前話で狙撃手として隣に伏せていた奴で鈴羽は観測手だ。

俺 「・・・何を始めるんです？」

分隊長 「何をつて決まってるだる模擬戦だよ。」

俺 （・・・はぁ・・・戦闘中毒ですね分かります。）

何故かまたやる事になってしまった模擬戦でのルールは、弾薬とナ

イフを訓練用で行うということだけとなった。

相手部隊（最精鋭部隊）は10名・・・10名？えっ何故に10名？え、6人の戦力差何？

偶然そこに居た指揮官（同僚）に助けを求めると、

、 、 、 、 、

≡ 、 、 、 、 、

（ 。 ！ ） ノ ”

ガンバレ

/ 、 、 、 、 、

ガンバレ

、 ≡ ;

、 、 、 、 、 ”

・・・ああそうかそういう事か。

あいつもか。

俺 「ああそうですか。 やればいいんでしょ殺れば。」

鈴羽 「字が違う気が・・・」

俺 「気のせいだ。」

―― 屋内戦闘訓練所上空にて ――

15:02

今俺たち狙撃班は、建物の制圧と言う本来では有り得ない模擬戦を行っている。

俺 「今回の作戦は、ヘリから特殊作戦群の立て籠もっている建物へ降下し窓から侵入し上のフロアから順次制圧していく作戦でいく予定で各フロアに5〜7部屋あるが何か意見はあるか？」

鈴羽 「降下後に屋上の配電盤を破壊した方がいいのではないでしょうか？」

俺 「確かにそうだな。他に何か意見はあるか？」

秀夫 「特に無いな。」

俺 「よしじゃあ、全員装備品の確認をしろ。」

全員 「」「了解」「」

P226 Combat TBのマガジンを抜き残弾数を確認しポ
ーチの中から出した銃弾をスライドを引いてチャンバー内に装填し
マガジンを装填する。

そして予備マガジン・ナイフ・訓練用手榴弾・靴紐等を確認して拳
銃の安全装置を解除する。

訓練でいつもやっているので一連の流れはかなりスムーズだ。

そんなことをやっているると戦闘開始1分前のアナウンスが鳴った。

俺 「用意できたか？」

秀夫 「ああ終わった。」

和哉 「終わりました。」

鈴羽 「すいません、もう少しです。」

司令部 「開始30秒前」

「29」

「28」

「27」

「26」

「25」

「」

「」

「5」

「4」

「3」

「2」

「1」

「戦闘を始めて下さい。」

合図とともに俺たちは、事前の計画通りヘリから特殊作戦群が隠れている建物の屋上へ、ヘリからラペリング降下し、配電盤の配線を少量のコンポジション爆薬（C-4）で爆破し屋上から反射鏡で室内を確認してから窓ガラスを切断してスモークを投げ込み秀夫を先頭に突入するまでは順調に行った。

ドアを静かに開けた直後に敵兵が背を向けて居たのでそいつの口に手を当てゴム製のナイフで頸動脈を掻き切った。（実際には火傷をする。）

死亡扱いのその男から秀夫が装備品を奪った。

秀夫 「MP5SD6？こんないい銃も装備しているのかよw誰か使うか？」

和哉 「じゃあ自分が。」

秀夫 「自分で使わせてもらうよ。」

和哉 「・・・」

そして俺らは、順調に3部屋の制圧が終わった。

そして5部屋目俺がファイバースコープで室内の様子を調べていると室内に敵兵が4人いるのが確認できたので鈴羽に「右の奴を倒せ」とハンドサインを送った。了解 と来たのでドアを少し開けフラッシュバンを投げ込んだ。

三秒後 部屋が閃光で満たされた。

「敵襲！！」中に居た敵兵が叫んだがすぐにおとなしくなった。どうやら和哉が昏倒させたようだ。

俺 「命令無視 減俸」

和哉 「・・・えっ？」

俺 「秀夫の。」

秀夫 「何故俺の給料？」

俺 「俺らを巻き込んだから。」

和哉・鈴羽「ザマアwww」

とくだらない会話をしながら昏倒している兵士の装備品を奪っていく。

敵兵の持っていた銃がH & a m p ; K H K 4 1 6 高倍率A C O Gサイト搭載型 だったので拝借していった。

鈴羽は、「もうこの銃でいいや。」と言いながらM 8 7 0 (・・・凶悪な物を)を拝借していた。

和哉は、8 9 式小銃を持ちながら「なんで一応特殊部隊なのに屋内での近接戦闘用の銃器じゃ無いんですか？」と聞いてきたので、

「ヘリ以外で来たときにこいつで狙撃する援護のつもりだったんだろ。」と言いながらH K 4 1 6を見せる。

「ああ成程そういう事ですか。」

俺 「まあさっきの下の連中にばれただろうしさっさと始末しますか。」

全員 (やつば怒らせると怖いのはこの人だ)

俺 「失礼なことを考えなかったか今？」

全員 「いえそんなこと考えてなんて・・・ すいませんでしたあ」

↑O T L

俺 「・・・」

「もういい。取り敢えず二手に分かれるぞ。」

| 2 F |

鈴羽 「おかしいですね。中に誰も居ない・・・」

俺 「トラップに注意しろ。」

鈴羽 「了解」

―― 1F ―

秀夫 「どういう事だ？」

和哉 「さあ？」

・・・基本的にこの二人はトラップ等の注意をしない。

俺 「動くな!!」

秀夫 「見方だ撃つな!!」

俺 「チツ」

秀夫 「そのうち俺誤射に見せかけて殺されてるんじゃ・・・」

ふと外を見てみると特殊作戦群の連中がこちらの建物へ向かってきている。

俺 「全員防御態勢をとれ!!」

全員 「了解!」

取り敢えず俺は窓際から銃が出ないようにして敵の人数を数えたところ5人全員居たので無線で報告した。

そして分隊長を射殺しようとして探したものの流石特殊作戦群 まったく区別がつかない。

取り敢えず一番遮蔽物に近い敵兵から射殺していった。

敵は、遮蔽物に隠れようとしたが秀夫がどこで拾ったのか分からないがミニミ軽機関銃で弾幕を張っている為身動きが取れずにいる。

その時敵兵の一人が閃光手榴弾をすぐ近くで炸裂させたため閃光によりこちらが防衛していた建物に侵入された。

侵入してきた敵兵を鈴羽がM870で射殺していたものの1人が鈴羽をナイフで人質にとった。

よく見ると特殊作戦群分隊長のようだ。

俺 「おとなしく投降しろ。」

部隊長 「断る。」

膠着状態が2分程続いたが秀夫が動いたことにより状況が流動的になる。

秀夫 「動くな。」

部隊長 「クソッ 分かったよ投降するよ。」

秀夫 「そのまま武器を置け。」

部隊長 「こいつを殺した後にな！」

次の瞬間に色々なことが起こった。

秀夫が部隊長にトリプルタップし、俺がナイフのみを撃抜いた。

そして鈴羽は一応無事だった。

俺 「大丈夫か？」

鈴羽 「怖かったです。」

そう言いながら泣きついて来た。

泣き止むまで二時間以上かった。（秀夫と和哉は空気を読んで居なくなつた（決して逃げた訳では無い……らしい））

鈴羽 「あ、班長すいませんでした。（汗）」
俺 「問題ない。（汗汗汗）」

その後部隊長が面会に来た。 気まづくなって律儀に待っていたようだ。

部隊長 「無茶なことを言ってすまなかった。」 謝罪の言葉を口にした部隊長は完全に別人と化している。

鈴羽 「あ、大丈夫です。」

俺 「だ、そうだ。」

部隊長 「と言うか君たちの班は相当強いな。まさか民間企業に自衛隊の精鋭部隊に勝つとは・・・民間では惜しい部隊だな。後で土産話にさせて貰うよ。」

俺 「いえいえ自分たちよりこういう作戦に向いた部隊なら居ますよ（多分・そう思いたい）。あと現在の職で満足してますから。」
部隊長 「そうか。司令官はこの部隊が各部隊でも最精鋭部隊と聞いたんだが。」

俺 （あの野郎（司令官）覚えてろ。後で後悔させてやる。（違う意味で））

その後部隊長と名刺を交換して本日の終業時間となった。

秀夫 「そういえば今日これをお前に頼むんだった。」

そう言いながら秀夫はライフルケースを無造作に渡してきた。

俺 「何だよこれ。」

秀夫 「来週エアライフル射撃の競技会があるから調整頼む。」

俺 「断る。」

秀夫 「頼む。」

俺 「断る。」

秀夫 「た、頼む。」

俺 「断る。」

秀夫 「こ、これで頼む。」 そう言いながら1万円を出してきた。
俺 「・・・はあ。 それの他に俺の削られる睡眠時間分働けよ。」

秀夫 「ありがとう！」

21:00

― 自宅 ―

自宅に各種工作機械を保有しており一応猟銃等販売事業許可を取得しているので正規ルートでの製造・販売・輸入・修理が可能だ。

副業として行っではいるが自分の睡眠時間が削れてしまうのは嫌なので完全予約制となっている。

秀夫から渡されたエアライフルは
FXエアーガンズ社製 モンスーン 5.5mm弾モデルのエアライフルだ。

狩猟用モデルだが一応海外から取り寄ったバレルを5軸NCで加工した物を取り付けている。

バレルの交換・修理・清掃・試射まで終わらせて気が付くと02:30となっていた。

そして作業机の前で完全に深い眠りに就いた。

自衛官との交流（後書き）

終焉の終わりの一番最初の前日です。

・・・なんかフラグが立った気がしなくても無いが気にしない。
（もうどうつにでもなれw）

遭遇（前書き）

予想以上に短いです。

現実的に考えられる装備の詳細なんて気にするんじゃないかなかった・・・
（殴

遭遇

― 自宅 ―

08:25

そして俺は起床した。

「机痛い、寝すぎたかな。」

ふと左腕につけているミリタリーウォッチ（TRASER Commander Titan）を見ると

「え？08:30？」

・・・遅刻した！

・・・まあいいか。あの指令官だし。

とその時携帯電話の着信音が鳴った。
携帯電話を開くと発信者は秀夫となっている。

俺 「なんだ秀夫か。」

秀夫 「何だとは何だw」

俺 「で？」

秀夫 「ああそうだった取り敢えず外に出ろ。」

俺 「ああ？まあいい。」

秀夫に言われるがまま家の外に出た。
自宅の位置は勤め先と同じく郊外にある。

・・・？

何も無いじゃないか。どうしたって言うんだ？
後ろを見ると向かいの家の老人が居た。

俺 「あ、どうもおはようございます。」
と言い終わると同時に老人がいきなり殴り掛かって来た。

反射的に突き飛ばしてしまったがどうにもこの老人様子がおかしい。

じっくり観察してみると・・・
拳動が変で瞳孔が開ききっている？

まさか既に死んでる？

周りを見ると不審に思ったのか周りの住民たちが集まって来ている。

「おいおい、どういう事だよ？」

明らかに住民の拳動がおかしい。

「誰か話を聞いて下さい。」

・・・返事が無いただの屍のようだ。

（おっと冗談を言ってる場合じゃ無いようだ。）

これは現実なのか？

生き残るためには・・・まあいい今出来ることをしようじゃないか。

取り敢えず右足首付近に取り付けてあるアングルホルスターからスミス&ウェッソン製のナイフを取り出し念のため最終警告をする。

「動くな！！ 動いたら殺す！」・・・普段だったら即警察が来て逮捕ものの台詞を吐く。

但し止まるものは居なかった。

便宜上あのゾンビのような何かを奴らと呼ぼうと思う。

右手に持ったナイフを一番近い奴の頭に突き立て刺した時の力のまま前へ突き出すことにより刺されて奴の額からナイフの刃が抜け更に後ろに居た奴らも将棋倒しとなって倒れていく。

三体ほど奴らを刺し蹴り倒す動作を繰り返し自宅へと戻りすぐにシッターを閉めた。

携帯電話を取り出すと秀夫に電話を掛けた。

秀夫 「外にで「どういう事だあれは！？お前のせいで死にかけたんだぞ！後で覚えてろ！！」すまなかった。何が起きているのかは俺にも分かん。」

俺 「クソッ で？どうするんだ？俺は取り敢えず職場へ行こうと思っているんだが・・・」

秀夫 「奇遇だな俺もだよ。あんたの家から俺の家はルート上だろ？」

俺 「寄って行けってか？」

秀夫 「いつも通り遅刻したからなwww あと腕のいい観測手が必要だろ？」

俺 「・・・お前じゃなくてもいいんだが「何・・・だと・・・」

あ、あとお前のエアライフルを使わせてもらっぞ。」

秀夫 「ああそいつは使ってもいい。と言っか持ってきてくれ。」

会話を終えると俺は自宅中から使えそうな装備・物品を掻き集めた。銃を一応取り扱ってはいたものの注文を受けてから取り寄せだった為実銃が無い。

この時ばかりは実銃を置いておけば良かったと本気で思った。家から持ち出した装備品

- ・エアライフル

俺が普段から愛用しているディオ光学機器（日本）製の高倍率スコープを上のマウントレールに取り付けたセミオートマチック式エアライフル

- ・・・スコープの方が金額が高い。

- ・ナイフ

説明するまでもなく奴らゝ鉄板まで切り裂けるCQB用のかなり頑丈なナイフとマルチツール等数種類

- ・AN／PRC-148個人用携帯無線機

アメリカ軍の正式採用モデル

- ・第3．5世代ナイトビジョン

単なる暗視装置である。（最新モデルだが・・・）

・レーザー距離計内蔵型双眼鏡（LRB 25000）

ニューコンオプティック社製の軍用モデル25Km先の目標までの距離を正確に測定することが出来る。

・GPSマップ

人工衛星を利用した地図

・地図

→のが故障した時の為の予備

・電池・ソーラー式充電装置

名称のままである。

・エアライフル用ペレット

鉛でできたのエアライフル用の弾薬（1缶500発入りで600円前後）

・携帯食料

アメリカ軍で大変評判のいい（違う意味で）レーションでは無く自衛隊向けの戦闘糧食

・ノートパソコン＋人工衛星通信モジュール

情報収集用である。

・・・あと迷彩服とタクティカルベスト（ほぼロスコ社製）等で総重量は25Kg程

奴らの行動を見ていてわかったことは、

- ・音に敏感に反応する。
- ・各感覚器官は聴覚のみで他は衰退している。
- ・頭部が弱点ではあるものの他の部位でも倒すことは可能のようだ。

そうして準備・調査を終えるまで30分程掛かり、自宅の車庫からマウンテンバイクで秀夫の自宅へ向け出発した。

遭遇（後書き）

感想を頂けるととても作者はありがたいです。

秀夫との合流（前書き）

毎日このペースで投稿できればいいのに・・・

秀夫との合流

― 住宅地 ―

09:10

現在、空は快晴で10月らしい穏やかな天候となっている・・・がしかしマウンテンバイクに乗って時速28.7Kmで走っており汗が止まらない。

走りながらトランシーバーのヘッドセットに向かって秀夫を呼び出す。

俺 「ゼエ、ハア 秀夫か？」

秀夫 「ああ俺だがどうしたそんなに息を切らせて？ 別にアニメ見てるからゆつくり来ても構わないのに・・・」

・・・ん？

今こいつはなんて言った？

アニメと言ったか？

俺 「・・・。」

秀夫 「すまなかつたから、その無言のトランシーバー越しで伝わってくる威圧感をやめてくれ。」

秀夫の発言を無視して俺は、一般的なエアライフルの有効射程である約50m前方に2体の奴らが居たのを確認するとスリングで背負っていたエアライフルの空気残圧のメーターを確認し5連装マガジンに全て弾丸が入っていることを確認した後、弾丸の降下距離を考慮した上で、（と言っても50mだとレティクルの中心w）レティクルを右の奴のこめかみに合わせトリガーを引いた。

因みに普段から使用しているM110と同じ重さ(1.8Kg)にトリガーブルを調整済み。

トリガーを引いた瞬間 エアライフル本体に内蔵されている圧縮空気タンクに取り付けられている弁が解放され、タンク内の圧縮空気がチャンバー内に正確に保持された鉛製ペレットを押し出し、ライフルングによって弾丸の側面部に旋状痕を刻みながら回転し、普段から使用している7.62×51mm弾とは比較にならない程の低音で50mの距離を飛翔し、奴らの頭蓋骨を貫き内部で弾頭がイクスパンション(弾頭の先端部が潰れ運動エネルギーをそのまま殺傷能力に変換される現象)を起こし脳の機能を停止させた。

そして正確に脳の機能を停止させられた奴はその場に崩れ落ちた。

俺は、一発目を発砲したのと同時に隣の奴の頸椎部に照準し発砲した。

頸椎の神経を破壊された奴は全身の筋肉を収縮させ活動するための電気信号を強制的に遮断されその場で身動きが取れなくなり一射目と同じように崩れ落ちた・・・

その瞬間俺は、訓練生時代に教官から教えてもらったある言葉を思い出していた。

『銃声が聞こえる頃には既に弾丸はお前を貫いている。』

普段の俺は、実銃を使用した狙撃手の為この言葉では狙撃する側だが今の状態では、俺はいい獲物だ。

・・・と思うと同時に俺は行動を開始した。

どうやらやはり奴らは、音にのみ反応しエアライフル程度の音量では気が付かないようだ。
その辺のミリタリーショップでボウガンとかを置いてあったら回収して使わせてもらおう。
奴らに対しても人間に対してもやはり無音で遠距離からテイクダウンできる方がいいに決まっている。

―― 住宅地 ―

11:28

俺 「大体お前の家の家のそばに来たがお前の家はいつたい何処だ!？」

秀夫 「そこから4時の方向に386m前進したところ。」

・・・あのマンションか。

俺 「了解。何号室だ?」

秀夫 「1503号室」

随分と高い階だなおいw

―― 1503号室前 ―

11:35

コン コン・・・返事が無い。

コン コン・・・やはり返事が無い。

・・・チッ

パシュ パシュ パシュ（エアライフルの発砲音）・・・ダン!

！（蹴破った音）

秀夫 「うお！？ 吃驚した！」

・・・スッ

秀夫 「非常に怖いので笑顔のままナイフを構えるのをやめて下さい。お願いします。アニメを見ていたことは謝罪しますので・・・
つてもう投げてるし！？」 言いながら秀夫はぎりぎりでナイフを避けた。

ザクッ

12:00

秀夫の家で昼食を取ってからお互いの知っている情報を共有した後すぐに会社に向かって出発した。

秀夫の所有しているジープに（あくまでもジープ決してハンヴィーでは無い）乗り込み（一応M1044（武装型）を所有している。）
・・・なぜここまで乗って来なかったかって？

簡単な話だ。現在修理中だからだw（職場にて）

そして俺たちは、自らの職場へと向かって行った。

秀夫との合流（後書き）

感想・・・下さい。w

移動（前書き）

battle field 3をやっていた為連載が遅れました。
申し訳ございませんでした。

移動

12:05

― 移動中 ―

四輪駆動車に乗り秀夫の家から出発し16分ぐらいして複数体の奴らが歩いているのが見えたので

俺 「おい、あれが見えるか？」

秀夫 「・・・見えねえよ。」

・・・？

俺 「450m先 11時の方向」

秀夫 「？ああ見えた。・・・よく見えるな。」

俺 「狙撃手だから」

秀夫 「なるほど・・・（理由になってない気が・・・）」

俺 「どうする？無駄な戦闘は避けていきたいが」

秀夫 「おいそれって殆ど行動を制限しているような」どうするんだ？」よし狙撃姿勢を取れ。」

レーザー距離計付双眼鏡を秀夫にながら「・・・了解」と適当な返事を返す。

秀夫 「430m先 風向東から1.3の風・・・無理だな。」

俺 「車で近づくんじゃないのかよw」

秀夫 「ですよー」

秀夫が車を奴らに近づけていき40m先付近で秀夫が「今だ。撃て！！」

俺は、「撃て！！」と言われた瞬間に一番手前の奴を射殺し（もう死んでると言ってもいいが）2 m横に居た奴らの脚部と頸椎をセミオートエアライフルならではの連射性能をいかし奴らの動きを封じそれと同時に秀夫が「揺れるぞ、掴まれ！」と言ったのだが狙撃姿勢から移行するのは急すぎたのでフレームに軽く頭部をぶつけた。

俺 「・・・（イラッ）」

軽くイラつきながらエアライフルの弾奏を交換し奴らのこめかみを的確に撃抜いていく作業を終え通常の日常ならあり得ない光景が住宅地の道路に広がっていた。

秀夫 「悪かったから機嫌なおしてくれよ」

俺 「別に問題ない」

その時後ろから複数台の自動車の音と自動火器の音が響いてきた。

・・・おいおいなんであんなチンピラ共が持つてるんだ？

確かに自動散弾銃やドラグノフ式狙撃銃（AK47をモデルにはしているが内部機構はロータリー・ボルト方式を使っており全く違う）は日本国内で所持可能だが装弾数が散弾銃なら2発ライフルなら5発までと法律で決まっていたはずなのだが・・・

さつきから響いている銃声を聞いていると自動火器を20～35丁持つていて次々に持ち替えているか弾倉を携行不能なレベルで持ち運んでいるかのどちらかしか無いあくまでも合法的に所持していたのであれば。

と言うことを考えると改造弾倉若しくは、アサルトライフルを所持しているかのどちらかとなるが出来れば後者は無いことを願いたい。

そんなことを考えていると助手席側の窓（もちろん防弾ガラス・・・）と言っ幸運は無い。）が割れた。

どうやらやはりチンピラ共がアサルトライフルを乱射しながらこちらに向かって来ている。

拡声器で「その車あいいの乗ってんじゃないかとまれえ」と撃ちながら言ってきた（撃ってきたといってもフルオートでリコイルコントロールもせずになるので数発しかこちらには飛んでこない）ので秀夫に「撃つていいか？」と聞き秀夫はうんざりとした顔で発砲許可を示すハンドサインをこちらに見せた。

一番手前の軽自動車を運転しながら拡声器で怒鳴ってくる奴の肘を狙う。

距離が約150mありこのエアライフルの有効射程は大きく外れているが気にせずスコープのルーラードットで弾丸の降下量を大まかに算出し発砲。

拡声器から「ギヤア痛え あの野郎撃つてきやがった!!」それに同調して周りのチンピラ共が「殺しちまえ!」だの「奴を痛めつけてやれ!!」だの怒鳴り散らしている。

そんな連中を俺は五月蠅い奴から順に罵声から5.5mmの鉛製の弾丸により声にならない叫びへと変えていつてやった。

そんな中秀夫が「うわあえげつねえことしやがる」と言ってきたので「お前だったらどうする?」と切り返してつた。

少し悩んだのち秀夫が「ここにはない装備を使つていいならブローニングM2重機関銃で奴らの車の駆動系の深刻な損害を与えてから奴らの端っここから撃つていくな」

・・・こいつのほうぐえげつないな。 （M2重機関銃等で使用されている12.7×99mm弾で手足を撃たれると良くて手足の欠損悪くてミンチだ。）

正確な銃撃により2発ほど外したが7名のチンピラを負傷させることが出来たので良い戦果だと思う。

チンピラ 「追いかけるのをやめろお 野郎許さねえぶつ殺してやる!」と捨て台詞を吐きながらチンピラ共の車列は減速していた。

秀夫 「やっと退いたか」

俺 「そのようだな」

目の前にホームセンターが見えてきたのでそこで必要な物資を入手していこうと思うので秀夫に対し「あそこに行ってくれ」と一言だけ述べたところ何を言いたいのか察したようで「了解しました!班長殿」と軽口をたたいてきた。

12:40

―― ホームセンター店内 ―

俺と秀夫はそれぞれ別々に別れて物資の調達をしていた。

秀夫には、生活必需品と燃料を回収してもらっている。

俺は、武器として使えるもの等を調達していた。

一番近い棚が針金を置いている棚だったので取り敢えずピアノ線をカートの中に居れた。

調達した物資

・ピアノ線

・針金

・電池

- ・ 絶縁テープ
- ・ 革
- ・ トランシーバー
- ・ 各種整備用工具
- ・ 発電機
- ・ 電子工作用の工具一式
- ・ アーク式溶接機一式
- ・ 軽油
- ・ 硫黄
- ・ 木炭
- ・ 硝酸アンモニウム
- ・ 各種燃料
- ・ クロスボウ

と調達をほぼ済ませあと今一番必要な物は銃火器だなど思っている
と秀夫が持ってきたカートの中を見ると食料品と少量の燃料は入っ
ていたのだが・・・

俺 「このDVDの山は何だ!？」

秀夫 「アニメですが何か(キリッ)」

・・・ゴスッ(エアライフルのストックで秀夫を殴りつけた音)

秀夫 「orz 申し訳ございませんでした。・・・こうなるこ
とは分かっていたのでHDDに入れておきました。」

・・・ゴスッ ゴスッ (更にエアライフルのストックで秀夫を殴
りつけた音)

俺 「そんなことをしている暇があつたならもつと物資を探す時
間があつただろ!! 時間を無駄にするな!」

と言おうとしたときに店外からあの自動車の音が聞こえてきた・・・

13:10

――ホームセンター店外――

Side チンピラ

あのジープにの二人組に撃退された後頭のところに戻り頭に経緯を話すと頭もキレてあの二人組を殺そうと躍起になり今に至る。

「頭あの車でつせ有坂の（先程肘を撃抜かれた奴）腕を撃つたのが乗っていた車は！あいつらぶっ殺してやりましょう！」

頭 「まあ待て走っている奴に当てることのできるなんだろう？こちら側に引き込めればいいじゃないか。拡声器を超越せ」この発言から頭と言っただけあつて比較的頭の回る奴のようだ。

部下の男が拡声器を持ってくると「私は、君たちが投降してくれば危害を加える気はこれっぽっちもない。今から15分間待ってやる！それまでに出てこなかったらあとは分かるな」と頭が拡声器で中の二人組に警告をした。

・・・そして15分が過ぎた。

「もう15分過ぎましたよ。頭」

頭 「ああそうだな最後通牒を無視するとはいい度胸だ！ 全員奴らをぶち殺せ！！現金を忘れるな！！」

「「「「！っ了解！！」」」」

Side out

威勢のいい声を上げながら店内へ銃声と罵声と足音・・・を響かせながら嬉々として店内へと入って行った。

同時刻

――ホームセンター店内――

奴らの姿を確認したのと共に俺たちは行動を開始した。
店内の至る個所にトラップを設置し一カ所に合流した。

――15分後――

チンピラ共が店内に侵入してきた。

俺たちは、店内の防犯カメラの映像を従業員用の携帯情報端末に転送してチンピラ共の行動を眺めていた。
レジをこじ開けている奴・俺らを殺そうと躍起になっている連中達
が居たのを確認し人数が20人前後だということが分かった。

――2分後――

するとすぐそばに一人だけでこちらが隠れている物陰に近づいてくる奴が居たのでそいつの顔が出てきた瞬間に口元を抑えそのまま首の骨を本来向くことのないであろう方向に折ってやり一人消すことに成功した。

死体からイズマッシュ・サイガ12を秀夫が奪い物陰に隠すと秀夫が「ショータイムの始まりだなwww」と冗談を言ってきたので「少しは俺の分も残しておいてくれよ」と冗談を言った。

工具売り場のコーナーで二人組が居たが前しか警戒していないので後ろを歩いていた奴の首によく研ぎ澄ませたピアノ線を男の首に掛け一気に力を入れた。

一瞬でAK47自動小銃を所持していた男の頸動脈・頸静脈を切断し、頸椎さえも刈り取った。

0・5秒で頭部とお別れをした男が崩れ落ちる音とともに、振り返った男が見たのは、頭部が無い仲間と迷彩服を着た男と自分の目にめがけて約100m/秒で飛翔してくるジュラルミン製のフレシエツトとその射手であった。

それがその男の見た最期の光景だった。

87・2FPのエネルギー量を持つジュラルミン製の矢は先端が円いことにより目標に命中した際より効果的に頭蓋骨を破壊し脳の機能が停止した。

移動（後書き）

・・・ホームセンターを出すとどうしても内容が被ってきてしまう
罨（作者の文才が無いだけorz）

ホームセンター内での戦闘

目に矢が刺さり脳の活動を強制的に停止され男が崩れ落ちたあと俺たちは、遺体から装備を奪い次の獲物を探しに極力音を立てずに走りだした。

曲がり角を曲がるといきなり3人組の男と鉢合せになり一番手前の男にAK47を向けられたがその男がトリガーを引き終える前に秀夫が所持していたロシアのイズマツシュ社製サイガ12半自動散弾銃が火を噴き発射されたスラッグ弾が2人を貫き、もう一人の男は俺が投げつけたナイフが首に刺さり絶命した。

・・・どうやらチンピラには、AKシリーズが人気のようだ。

俺 「すまない、助かった」

秀夫 「貸し一つだ」

今の銃声でチンピラ共にまだ居ることを確信されたようだし派手に行こうと思う。

俺 （派手に行くから二手に分かれよう）

秀夫 （了解）

ハンドサインで合図を出すと秀夫も返答してきたので即席のトラップを仕掛け始めた。

トラップを設置し終えたのでチンピラから拝借したマカロフ自動拳銃の残弾数を確認し各棚をクリアリングしながらを駆け出した。

Side チンピラ

「おいさっきの銃声聞いたか？」と隣の男に聞くと、隣の男が「ああ聴こえた」と返してきて

他の奴が「あっちの方向からだ」と言っただのでレジを漁っている2人を置いて7名でその方向へと向かっていった。

銃声が鳴った地点のそばに行く

・・・仲間が倒れており辺りは血の海になっていた。

「おい！どうした！？何があった！？」

そう言いながら生存者がいない仲間だったものをゆすつたら何か

が千切れる音がした。

次の瞬間辺り一帯が爆炎で包まれチンピラ達が原型を留めていない肉塊へと変化した。

Side out

クリアリングをしながら索敵をしていると耳をつんざくような爆音が聞こえてきた。

あの「何か」が千切れた音とは、ケーブルが千切れた音でイラク戦争時によく用いられたIED (Improved Explosive Device・・・即席で作れる爆発物)と同じ原理で、ケーブルが千切れる前はアンプとリレーに繋がっているだけで何も起きないのだが、ケーブルが千切れることによりリレーが動作しなくなり起爆装置(ストーブの点火用ヒーター)が作動する。

使用した爆薬は、資材コーナーに置いてある厚さ5mmの鉄板にアルミホイルで枠を作り硝安油剤爆薬(硝酸アンモニウムと軽油等の

混合物）を敷き詰め殺傷能力を上げる為に大小さまざまな釘とボールベアリング（・・・）を互い違いに丁寧に並べただけの簡単な物で以前の作戦でも役に立った。

但し爆薬となつてはいるが、起爆性は低いので信管を使うべきなのだが、そんなものは無いので銃弾の雷管を利用した。

「ブービートラップに引つ掛つたか」そう俺は呟きながらレジを漁っていたが爆発音でしゃがみこんでいる男達に対しマカロフ自動拳銃で心臓2発↓頭部1発とトリプルタップで仕留めた。

S i d e 秀夫

「はぁ、どうしてこうなつた？」そう呟きながら秀夫は、遮蔽物に隠れながらタイミングを窺い半自動散弾銃のリロードを済ませ遮蔽物から銃のみ出し発砲

今回はスラッグ弾ではなく12ゲージ弾を使用した為こちらに向かつて発砲してきた奴に命中したようで、「――」声にならない叫びを上げている。

遮蔽物から飛び出すと続けざまに発砲し弾倉の中のショットシェルが尽きたところには辺りが血の海となりどこかしら欠損した死体しか残っていないかった。

「何度見ても気持ち悪いな、これは」吐き捨てるように秀夫は言う、使えそうな装備を回収し始めた。

S i d e o u t

俺は今、店外の駐車場でふんぞり返っているチンピラのリーダー格とみられる男が見えたが、あそこに行くのは自殺行為なので、あの男が乗ってきたとみられる車両に軍用の発信機を取り付け、その場を後にした。

車両から300m程離れた場所で、トラックの荷台の上で狙撃銃（距離的に判別できなかった）を構え伏せている男（狙撃姿勢ではなくなぜか足が浮いている）が居たのでそっとコンテナの上に上り、静かに近寄ると右肩に左手を掛け引き起こすと見慣れない男を見て驚愕している男に「お前のような屑が使うよりマシだろ」と呟きながら胸元にナイフを立て男の死亡を確認し、男が使っていたドラグノフ式狙撃銃と近くに置いてあったガンケース内のSV-98狙撃銃をスリングで掛けて秀夫のところへと向かった。

ホームセンター内での戦闘（後書き）

散弾銃等の装弾数が2＋1発では無いのは密輸品だからです。

肅清（前書き）

・・・連載遅れてしまいました。

肅清

ホームセンターの駐車場から店内に戻ると辺り一面が血の海に変化していた。

店内の奥へ足を進めると後ろから聞き慣れた声で「銃を足元に置け」と言われたので大人しく銃を近くにあったテーブルの上に置きながら後ろを振り向き散弾銃を蹴り上げ男の喉仏めがけて軽く一突きした。

秀夫 「ぐふっ」

俺 「また お前 か」

うずくまっている秀夫に手を貸し立ち上がらせると秀夫が「あの時の恨みか!？」と聞いてきたので「いや今のは違うその前のだ」と返事をしたところ「何・・・だと・・・。何!? まだ恨みを持っているのか!？」

取り敢えず無視した。

秀夫 「で、これからどうするんだ？」

俺 「外で陣取っていた連中は帰ったみたいだが？」

秀夫 「で？」

俺 「工作室でちよつとした工作をしてから連中を皆殺しにしようかと。」

秀夫 「そうか。愛車に傷を作られたから俺も行かせるw」

注：この二人は、怒らせると危険です。

そう言いながら俺たちは、工作室に入り先程回収したジュラルミンの円柱をマシニングセンタ（注：数値制御式のフライス盤）に取り付け自前のノートパソコンを接続後3DCADソフトを起動してこれから必要な部品を作り始めた。

13:00

―― 工作室 ―

ホームセンターに設置してある工作機械がお世辞にも新しいと言える物では無かったので作業に手間取ってしまった。

必要な物は完成したので「そっちの作業は終わったのか？」と秀夫に声を掛けると「ん？ ああ終わった。」

秀夫 「敵さんの居場所は分かったのか？」

俺 「ああ特定した。・・・それと現在の状況についての情報がある」

秀夫 「何だ？ もったいぶらずに言えよ」

俺 「日本政府が政府非常事態宣言をして国家緊急権（国家を脅かす緊急事態に際して、政府が憲法秩序を一時停止して非常措置をとること）を発動して自衛隊の出動も許可したようだが・・・」

秀夫 「どうした？ 何か問題でも？」

俺 「発令後に各種政府機関とも連絡がつかないらしい。・・・マスコミを信頼するならな。」

秀夫 「で、俺たちの本部との連絡は？」

俺 「この辺ではノイズが酷くて無線が繋がりそうにない。」

秀夫 「権限は移行した後か？」

俺 「さあな」

秀夫 「分かった、で位置は？」

俺 「ここだ」

そう言いながら秀夫にGPSマップを見せログ機能を表示させると戦闘時には動いていなかった複数の赤いドットが動きだし、しばらくしてある一カ所で止まった。

この赤いドットは、先程駐車場で車両に取り付けた発信機から特定のパルスで短波信号が発信されている電波をGPS経由でマップ上に転送しているだけである。

ふと思い窓の外を見ると（奴ら）が駐車場に群がっていた。

俺 「どうやら他のお客も来たようだ。さっさと連中を仕留めに行くぞ。」

秀夫 「了解！」

13:35

――ホームセンター店内――

秀夫 「で、どうやって脱出するんだ？この状況から」

俺 「言わなくても分かっているだろ」

秀夫 「汚物は消毒だー ってか？」

俺 「・・・違うが、良いなその響きw」

秀夫 「やるしかないかwww」

・ 高圧窒素充填タンク

・ 高圧酸素

・ 耐油ホース

・ 放水ノズル

- ・ 燃料タンク
- ・ 逆止弁・・・炎が逆流してタンクに引火↓爆発となつては笑えない為である。
- ・ 軽油
- ・ 洗剤・・・増粘剤
- ・ 溶接用ライター・・・火花が出るだけの点火用
- ・ 防毒マスク

・・・etc

を用意すると燃料タンク内で軽油と洗剤を混ぜ台車に乗せると秀夫が後ろから荷物を積んだカートを押してきた。

俺 「用意はできたか？」

秀夫 「いつでもいいぞw」

俺が先導して消毒↓秀夫がついてくる↓車両に乗り込む と言う作戦とは呼べない作戦を決行した。

13：40

― ホームセンター入り口 ―

俺は、バルブを開き噴射ノズルから粘度を高め高圧窒素により圧力が高まり更に高圧酸素によって燃焼の温度が上昇した危険物が少し出たのを確認すると溶接ライターのトリガーを引いた。

ライターの先端部から4〜5片の火花が飛び軽油とガソリンを主成分とする液体に引火して（奴ら）にかかった直後に（奴ら）の皮膚が爛れ数秒後には炭の塊となっていた。

扇状に燃料を撒き散らして点火↓前進を繰り返し秀夫の車までたどり着いた。

俺 「ふう熱いなw ようやく終わった。」

秀夫 「それは置いていくのか？ 置いていくなら俺にもやらせろwww」

呆れながら秀夫に渡すと大変楽しんだようで（この間俺は現実逃避をしていた。）顔に煤が大量に付着していた。

燃料タンクを置いてきたのを確認するとSV-98狙撃銃を構え、燃料タンク↓高圧窒素充填タンク↓高圧酸素充填タンク の順でコック部に向けて発砲し内部の液体が周辺にぶちまけられたのを確認すると先程曳光弾に加工したライフル弾（先端部に黄燐を弾頭底部に仕込んだだけ）を発砲して燃料に引火した直後周辺の気圧が急激に変化したのを感じ熱風が肌にあたり、駐車場に居た（奴ら）は薙ぎ倒され高さ20m程の火柱が上った。

俺 「後は任せた。」

秀夫 「え、ああそのメンテナンスか。」

手に持っていたSV-98狙撃銃のボルトをオープン状態にして機関部をメンテナンスロッドで清掃のちエアライフルに乗せていたスコープをこちらに移しスコープのゼロイン作業も済ませている内にどうやら目的地に着いたようだ。

秀夫 「お客さん、着きましたよw」

俺 「分かった」

14:00

― とあるマンション ―

チンピラ達の本部があると見られるビルから800m程離れたマンションの屋上へとクリアリングをしながら階段を上っていくと途中でアサルトライフルで撃ち抜かれた死体が何体もあった。
・・・恐らくあのチンピラ共の仕業だろう。

怒りを覚えながら屋上へとたどり着くと後から来た秀夫も怒りを覚えていたようであった。

秀夫が「犯罪者や敵ならまだ分かるが、一般市民をここまで犠牲にするのは・・・」と呟いている。

狙撃地点で秀夫がスポッティングスコープ（高倍率の単眼鏡）を覗いて連中の状況を確認している間にSV-98狙撃銃の最終調整をしていた。

本来だったらM110狙撃銃を使っていたのでセミオート式のドラグノフ式狙撃銃を使いたかったのだが命中精度が期待できないので今回はこちらのSV-98狙撃銃を使用する。

秀夫 「ここから把握できるのは、屋上に1人、道路に3人、建物内に13人で一般市民若しくは人質とみられるものは居ない」と敵情を告げてきた。

俺はポーチの中から推進薬の量を一番少なくした弾丸を装填したマガジンを手の届くところに重ねポケットの中から同じ弾薬を解放状態のチャンバーに装填してボルトを戻しマガジンを込めた。

マンション屋上の縁に二脚で狙撃銃を安定させており銃身は微動だにしない。

秀夫 「風速0 m、距離820 m、気温・湿度はいるか？」
俺 「必要ない」

秀夫 「好きなタイミングで撃て」
俺 「了解」

安全装置を解除しスコープのMMLと呼ばれるタイプのレティクルで降下量を考慮し屋上でドラグノフ式狙撃銃を背負っている男の頭部に照準し発砲。
鈍い銃声が鳴り男の頭蓋骨から弾丸が侵入し地面にその中身をぶちまけた。

秀夫 「命中。いい腕だ。」

ビル前でAKで武装していた3人の歩哨の内2人が並んだ瞬間に発砲。

2人が崩れ落ちたのを確認し男が目の前で起きたことに驚愕している間にボルトを引き再装填し射殺。

秀夫 「命中を確認。そのサプレッサーも結構いいな」

SV-98狙撃銃のバレルの先端には、あの時ホームセンターで数値制御工作機械で製作したサプレッサーを取り付けており遠距離からだとかなり銃声が減音されており更に先程から使用している弾丸は推進薬を減らした亜音速弾である為300 mも離れると全く銃声が聞こえないのであった。

秀夫 「一番左の部屋の奴から仕留めろ」
俺 「了解」

S V - 9 8 狙撃銃のマガジンを交換して室内に居る男達の内一番階級の高そうな奴の膝を撃抜き立てなくなったところで助けに来た男達を射殺。

秀夫 「命中」

そろそろ反撃されそうなのでS V - 9 8 狙撃銃からドラグノフ式狙撃銃に持ち替え、セミオートライフルならではの連射力を生かして淡々と敵を射殺。

初弾を発砲してから約2分で敵は壊滅状態になった。

事務机の下で怯えてA K - 4 7を抱きしめている頭と呼ばれていた男に照準して発砲。

この瞬間に襲撃してきたチンピラ達は全滅した。

肅清（後書き）

友人 「『汚物は消毒だ！』 って入れて」

作者 「いや入れないから」

友人 「汚物は消毒だ！」

「汚物は消毒だ！」

「汚物は消毒だ！」

「汚物は消毒だ！」

「汚物は消毒だ！」

「汚物は消毒だ！」

帰宅↓執筆中

（。A）ハッ！

気付いたら書いていた件w

新手の洗脳かwww

事務所

チンピラ達が居た事務所と見られる建物の内部にいた武装して気が立っていて明らかに正常では無い連中を狙撃で壊滅状態に追い込んだあと、俺は屋上の上に残り周囲の状態を警戒していた。

― 事務所ビル前 ―

Side 秀夫

秀夫 「・・・にしてもあいつは人使いが荒いなあ」

そう呟いていると耳元を何かが高速で掠めていった。

・・・あ...ありのまま 今 起こった事を話すぜ！
ビルに入ろうとし手をドアノブに掛けた瞬間に鍵が吹き飛んだんだ・
・

な・・・何を言っているのかわからねーと思うが俺も、
何をされたのかわからなかった...

頭がどうにかなりそうだった... (ライフル弾が音速を超えている為)

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ...

Side out

― 同時刻マンション屋上 ―

先程から小型無線機のスピーカから秀夫の愚痴がそのまま垂れ流されて聞こえて来ている。

既に11回以上は呟いてる。

・・・次に言ったら ㊤・・・にしてもあいつは人使いが荒いなあ
㊤ イラッ

秀夫がドアノブに手を掛けようとしているところがスコープのレクティルライン越しに見えたのを確認してから、恐らく施錠されているであろうシリンダー部に狙いを付けて発砲した。

弾速約830m/sで目標に向けて発砲された鉄製のコアが入った徹甲弾仕様の7.62×54R弾は、約0.98秒で秀夫が手を掛けたドアの錠前へと侵入し、中のシリンダー部をぐちゃぐちゃにしながら侵入して鍵としての機能を完全に破壊した。

秀夫 「今撃ったよな!? 殺す気か!?!」

俺 「悪い。手が滑ったw」

秀夫 「なんだそうか・・・ってオイ絶対わざとだろ、絶対わざとだよな!?!」

俺 「記憶にございません。」

秀夫 「どこの政治家だよ!? ...ああ日本か」

俺 「さっさと入れよ。」

秀夫 「・・・」

秀夫が反論できずに項垂れながら建物へと入って行くのを見た後俺は、ドラグノフ式狙撃銃に取り付けられているピカニティーレイル

の上のディオン光学技研製のスコープを覗き秀夫が侵入したビル周辺の監視を再開した。

秀夫 《こちら秀夫、連中の事務所内へ侵入したが・・・これは酷いな。お前さんの狙撃銃で連中、頭から上が無いぜ。》

俺 《で、何か収穫はありそうか？》

秀夫 《・・・少し待ってくれ。三つほど施錠されたロッカーを見つけた。》

俺 《適当に漁ってくれ。》

秀夫 《了解した。》

全く以って関係ないのだが、現在俺が使っているドラグノフ式狙撃銃はSVD-Kと呼ばれ、木製ストックでは無く金属製のパイプでできた折り畳み式ストックを採用した近代化モデルで本来の木製ストックよりは若干重量が増してはいるものの、命中精度は金属フレームの採用により良くなっている。

秀夫 《ロッカー二つ分の鍵は見たんだが最後の鍵が見当たらない。・・・撃っていいか？》

俺 《了解。但し、先にボールとかでこじ開けることが出来るか確認しろよ。》

ヘッドセットの向こう側から、秀夫がロッカーに対しボールでこじ開けようとしているのか、金属を叩きつける音が聞こえてきている。

スコープにより、23倍に拡大された肉眼で見ると大差がない色鮮やかな景色（流石日本製w）の中で、何かが横切るのが見えた。

・・・？

一度スコープから顔を遠ざけてもう一度覗き込むとそこには、テクニカル（紛争地帯で反政府勢力がよく用いる重機関銃などを積んだ軽装甲・トラック等の車両）を先頭とした車列が見えた。

俺 《気をつけろ、奴ら車列で戻って来たぞ！ 先頭から2台がテクニカルで後の三台は軽トラックに幌を被せてある。少なく見積もっても42人は乗っているぞ》

秀夫 《さすがにそれは、不味くね？》

俺 《今すぐ作業を中止して迎え撃つ用意をしろ！》

秀夫 《了解 だが、使えそうな装備は使っていいよな？》

俺 《もちろんいいが・・・何か見つけたのか？》

秀夫 《まだ秘密と言うことでw》

SVD-Kの二脚を立てて屋上の縁に置き、この地点から、先頭から二両目のテクニカルの機銃手までの距離をレクティルラインで大まかに算出して発砲してから命中するであろう位置に狙いを付けた（偏差射撃）。

撃鉄が作動するまで引き金を引き、撃針で雷管に衝撃が伝わり小さな火種となり推進薬に点火し、燃燒ガスで弾丸が射出されるといいう一連の流れで旋状痕を刻みながらバレル内を進み緩やかな放物線を描きながら機銃手の頭部に命中して頭部が吹き飛んだ。

後続の車両の運転手は銃撃されたことに気付いたようだが、その間に先頭車両の運転手を射殺した為、先頭のテクニカルが横転し玉突き事故を起こしてその運転手は運転席から投げ出された事により即死した。

その瞬間から一人の狙撃兵による効率的な殺戮が始まった。

防衛戦（前書き）

サブタイトルが意味を為していない件・・・

防衛戦

先頭車両が横転したことにより、車列が停止し連中の身動きが取れなくなっている間に運転手とみられる者から正確に狙撃をしていた。

銃声が響き渡るのと共に、各車両の運転手が倒れていくのを間近で目撃しすぐに理解できた者は、何処から発砲しているのか全く分からない狙撃手に対し身を隠そうと遮蔽物の側に駆け込んだ。

しかし俺は、反応が早い（反撃される確率が高い）者の脚を順に撃ち抜いていった。

脚部からの激しい出血をしている仲間を助けようとして駆け寄った者は頭部が一瞬で消し飛んだ。

――数秒前の車列――

Side チンピラ

テクニカル運転手 「なあ、事務所が攻撃されたってホントなのか？」

乗員 「ああ。途中で一般人の乗っている車を襲ったら、反撃されたらしい。で、頭も頭に血が昇ったらしくてホームセンターに立て籠もっていた2人組に壊滅させられて何とか戻ってきたようだか・・・」

テクニカル機銃手 「で？俺たちは何をすればいいんだ？」

乗員 「決まってるだろ、取り敢えず事務所に向か

つて頭達を救助してホームセンターでくたばった連中の職に就くんだろwww」

テクニカル運転手 「そーだよなあ！」

テクニカル機銃手 「さっさと皆殺しにするぞ！」

乗員 「そういえば、こんな大量の武器何処にあったんだ？」

テクニカル機銃手 「だよなあ、俺も同じことを思った。まさかこんな量を港の倉庫の中に隠していたとはなw 抗争の時に使えればよかったのに」

テクニカル運転手 「違いねえ！」

乗員 「もっと速くならないのか？遅すぎて待ちくたびれたぜ」

テクニカル運転手 「黙ってる！ もうこのポンコツの限界だ！」
と言うのと同時に、甲高い銃声が聞こえた。

乗員 「何だってんだ！？」

テクニカル運転手 「お、おい！後ろを見てみる！！」

乗員 「うわあ！？」・・・何事かと振り返り
男が見た物は、頭部の半分以上が欠損している機銃手の亡骸だった。
・・・ピシッ

男の耳に何かにひびが入るような音が聴こえてきた。
恐る恐る振り返ると、運転手も機銃手と同じような死に方をしていた。

乗員 「うわっ！ まっまだ死にたくない！ 死にたくない！！」

そう男が蚊の鳴くような声を上げパニック状態になると、シートベルトを締めていなかった為横転した瞬間に投げ出されて地面に叩き付けられ視界が暗転するのはほぼ同時だった。

S i d e o u t

―― 事務所 ―

S i d e 秀夫

またあいつが対武装組織マニュアルに則った一方的な戦闘をしている間に施錠されていたロッカーの内部を漁ろうとしてバールで抉じ開けていたわけだが・・・

まさかこんなところにK o r d重機関銃があるとは思ってもいなかった。

K o r d重機関銃とは、12.7 x 108mm弾を使用する機関銃で、明らかな対物目的の機関銃である。

秀夫 「重すぎるだろ、これは・・・何であるんだ？ まあいいわ」

重機関銃と言う事だけはある、重量は32Kgもある。

威力は、テクニカルや軽トラック更にはブロック塀程度なら貫通する。

通常の小銃では有り得ない幅のスリングを使いKord重機関銃を背負い事務所のテラスに出て無駄にでかい二脚（実際は無駄ではないが。）を立てて車列がいると思われる地点に制圧射撃を開始した。

S i d e o u t

―― マンション屋上 ――

スコープの視界のなかで事務所のテラスに秀夫が何かをしているのが映った。

そして秀夫が構えているものに絶句した。

俺 「何だそれは・・・」

秀夫 「Kord重機関銃」

俺 「見れば分かる。」

もう一度車列のあった場所にスコープのを向けるとそこには、秀夫が発砲している12・7mm弾の曳光弾と通常弾が綺麗な放物線を描きながらテクニカルや軽トラック関係なく鉄屑へと変化させている光景だった。

あそこまで派手に撃つと反撃されるのでスコープを覗き、遮蔽物から身を乗り出して反撃しようとしてSKSライフルを構えている男の肩を撃ち抜き秀夫を掩護した。

12・7mm弾によって自動車のフレームと共に貫通された人体は、原型を留めずに肉塊に変化した。（腕に掠るだけでも肩まで無くな

るレベル)

秀夫が K o r d 重機関銃の 5 0 連装ベルトリンクを 3 回程再装填しその弾薬すら撃ち切った後には、自動車だった鉄屑と、燃料タンクから流出したガソリンが曳光弾により引火したことによる火と、辺りに立ち込めるタイヤのゴムが燃えている煙と、死体から流れ出していた血が火に炙られ焼けた鉄の臭いが辺り一面に立ち込めていた。

出勤中（前書き）

時間軸のずれを修正しました。

出勤中

―― 道路上にて ――

15:02

当たり一面に硝煙やタイヤの焼き焦げる臭いがする中、チンピラ達の生存者（と言っても殆どはkord重機関銃の餌食になっている筈だが。）の息の根を止める為に俺は右手にマカロフ自動拳銃を左手にフラッシュライトを重ねるように構えながら、炎上している車両群の中を歩いていった。

ちなみに秀夫は先程の事務所の中から周囲の警戒をしている・・・
筈だ（・・・そうだと思いたい。）

チンピラの死体や残骸・車両の中から使うことの出来そうな装備品を拝借していると、ふと後ろを振り返ると「この野郎　ぶっ殺してやる！！」と言いながら顔は煤だらけで服は血まみれの男がナイフを構え突っ込んできた。

俺は、突っ込んできた男の右脚の膝に蹴りを入れ男の関節部からは”グギッ”と嫌な音が鳴り男が声にならない叫び声をあげその場に崩れた。

俺　「で、誰を殺すって？」と相手の右手首を蹴り上げてナイフを弾き飛ばしながら男に聞いた。

男は、　「お、お前を殺すに決まってるだろ　ヒッた、頼む殺さないでくれ」何か戯言を吐いたようなので途中で男の額に銃口を突きつけると態度が豹変した。

拳銃を下すと男の顔が軽く笑った。

俺 「悪いがそうもいかないんでな。」 言いながら俺は、表情が豹変した男にトリガーを引いた。
パンツという軽い破裂音が響き薬莖の落下する金属音が辺り一面に響き周り無事だった左足を撃ち抜かれた男は、呻き声を上げながらもがき苦しんでいる。
彼には情報を吐いてもらうのでまだ生かしておく。

腕・脚が欠損した者を次々と射殺して周囲の安全を確保した。
先程の男のところに戻り銃口を突きつけながら「おい、立てるか？」と聞くと男は、「無理に決まってるだろ！」泣きながら言ったので俺はここで尋問を開始した。

俺 「お前らはいったい何者だ？」
男 「た 唯の組合員だ」

俺 「で、唯の組合員がなぜここまで重武装で此处に来た？」
男 「か頭の指示だ・・・」

俺 「武器等は何処に保管していた？」
男 「・・・」

折れている男の右脚に力を入れながら「もう一度だけ聞く。 武器・弾薬は何処に保管していてどのくらい残っている？」

男 「い痛え ゆ、許してくれ。 言ったら頭に殺されてしま
う！ わわわ分かった！ 港の倉庫だ！ あと40丁分ぐらいは
残ってる筈だ！ 許してくれ頼む」

俺 「これで最後の質問だ。」
男 「な、何だ？ 知ってる範囲ならなんでも答えてやる！！」

俺 「これからどうして欲しい？」

男 「だ、だから助けてくれって!!」

俺 「分かった。 助けてやる。」

銃口を男の頭部に狙いを付けて俺は引き金を引いた。

男の頭部から脳漿がぶちまけられた。

約束が違うかもしれないがこのまま奴らの餌食になるよりはマシだ
っただろう。

秀夫 《何か情報はあったのか?》

俺 《武器・弾薬の情報はあったが、ここからは遠い。 先に

本部へ戻ろう》

秀夫 《了解》

秀夫のいる事務所に戻るとロッカーなどに入っていたらしい銃器が
整然と並べられていた。

秀夫 「これ持っていくのか?」

俺 「邪魔だよな。 最低限の予備だけ持っていくぞ」 (職

場に行けば最新装備が置いてある為)

秀夫 「・・・最低限がこれなんだが・・・」

俺 「・・・。」

その後、武器・弾薬を秀夫のジープに積み込み職場へと向かってい
った。

| Japan military instructors C
ompany 敷地内 |

09:00

side 鈴羽

鈴羽 「ねえ、聞いた？政府が非常事態宣言をして国家緊急権も発動したっていう噂」

事務員 「あ、それ聞きました。そうらしいですね」と言つことはうちの企業の出番なんですかね」

そんな話をしていると敷地全体の放送から基地司令のアナウンスが流れてきた。

基地司令 《敷地内に居る全職員に告ぐ。 つい先程政府が非常事態宣言をした。 更に、国家緊急権の発動よって自衛隊の指揮権の一部が譲渡された。 これにより当基地はマニュアル『1-B2』を発令する。 これは訓練ではない。 》

《繰り返す。 敷地内に居る全職員に告ぐ。 つい先程政府が非常事態宣言をした。 更に、国家緊急権の発動よって自衛隊の指揮権の一部が譲渡された。 これにより当基地はマニュアル『1-B2』を発令する。 これは訓練ではない。 》

鈴羽 「え『1-B2』！？あの無茶苦茶な事例！？」

此処で使用されている危機対応マニュアルに掲載されている事例『1-B2』とは・・・

- 1． 国内での生物兵器の使用により政府主要機関が完全に機能を停止するレベルの状況
- 2． 政府機関の一部権限の譲渡
- 3． 敵対する者に対する武器の全面使用許可
- 4． 陸上自衛隊の一部（中央即応集団）の指揮権限譲渡

- 5 . 4 . による各種政府機関からの支援
- 6 . 内外の敵に対する実質的な戦争

現実的では無い事例として入社してから殆ど訓練をされたことは無い。

基地司令 《事例『1 - B 2』を持って当基地はディフェンスコンデイションを2に引き上げ許可なき侵入者に対しての発砲も許可する。》

《現在不在の職員の安否を確認するために各部隊は直ちに確認するように。》

鈴羽 「デフコン 2 ! ?」

事務員 「急いだ方がいいのかな？これは」

鈴羽 「すいません、この作業頼みます！」 事務員に書類を押し付けるとブリーフィングルームに駆け足で行った。

事務員 「了解です。 . . . 多いな 何だこの書類の山はw」

10 : 00

基地内で防衛線が至る所に設置され野戦基地と化していた。

現在不在の基地職員は、152名で現在連絡が取れている職員は28名程しかいない。勿論班長や秀夫さんもだ。

鈴羽 「無事だといんですけど . . .」

和哉 「秀夫先輩はともかく班長は前回のことがあったかrグフツ」

鈴羽 「べ、別に班長のことなんて(o)(* □)(o)」と言いながら机に顔を伏せた。

和哉 (分かりやすいなw)

鈴羽 「なんか言いました？」
和哉 「いえ、何も・・・」

15:00

― 基地内 航空偵察部隊 無人航空機操縦室 ―
Japan military instructors Companyで運用している航空機。

無人航空機

・MQ-9 ……基地内で常時無人兵器操縦技官が操縦している。

・RQ-11 ……歩兵部隊での運用

・RQ-16 ……歩兵部隊での運用

無人攻撃機

・MQ-8B ……近接航空支援用

基地司令 「現在の偵察状況は？」

操縦技官 「現在、MQ-9を3機飛ばして基地周辺や市街地の状況を撮影しているところです。・・・？」

基地司令 「どうかしたのか？」

操縦技官 「市街地に激しい銃撃戦の痕跡が・・・あつ誰かがこちらに向かって来ているようです」

基地司令 「モニターに映してくれ・・・何だ狙撃班か」

操縦技官 「え 今不在なんですか？」

基地司令 「安否不明だった で、あとどれくらいで到着する？」

操縦技官 「約34分で到着予定です」

基地司令 「こちらに到着するまでサポートをしてやってくれ」
操縦技官 「了解」

出勤中（後書き）

現実的には有り得ないレベルで予算・権限・装備・人材がある企業

・・・やりすぎたと思っている。
後悔している。

無人偵察機

― 基地内 航空偵察部隊 無人航空機操縦室 ―
15:02

航空偵察部隊 部隊編成

・司令部

・無人偵察航空機部隊・・・無人機をメインとする部隊

・MQ-9 偵察班

武装解説

AGM-114P ヘルファイア? ×4発・・・

主目的：対戦車・対装甲車両 射程：9km

ペイブウェイエーザー誘導爆弾×2発・・・GBU

-12: Mk 82 500ポンド爆弾

・MQ-8B 航空支援班

武装解説

ヘルファイア? 対戦車ミサイル

ヴァイパーストライク誘導爆弾

APKWS 70mmレーザー誘導ロケット弾

・有人観測ヘリ部隊・・・有人観測ヘリをメインとする部隊

・OH-6 砲撃観測部隊

・整備班

MQ-9 操縦技官 「システムオールグリーン、マスターアーム
オン繰り返すマスターアームオン」

観測部隊管制官 「了解。」

《こちら無人航空部隊、車両内の職員この無線が聞こえていたらそ

こちらの所属名を名乗れ》

少し間を置いた後

秀夫 《ん？ああこちらイーグル-2 もしかして俺の車の上空を行ったり来たりしているのはうちの無人機か？》

観測部隊管制官 《そうだ。 只今より貴官等のエスコートを行う。》

俺 《了解した。》

MQ-9 操縦技官 「繋がりましたね」

観測部隊管制官 「そのようだな」

MQ-9 操縦技官 「っ！？ 車両前方3・2Km前方に感染者と見られる群れがあります！」

各司令部と共有されている操縦技官のモニターには、モノクロの赤外線画像に白く映っている大量の熱源がうごめいているのが見えた。IRカメラの映像から高解像度の監視用カメラに映像が切り替わった瞬間管制室の中でざわめきが起った。

数分間の沈黙の後「これが感染者達か・・・」と管制官が呟いた。観測部隊管制官《貴官らの前方2・1Kmに感染者達とみられる群れを確認した。》

映像を見て衝撃を受けながらも管制官は次に行うべき命令を下した。

俺 《何だと？》 俺は双眼鏡を覗き込んで絶句した。

《CASを要請する》（CASとは、Close Air Supportの略称で近接航空支援のことである。）

MQ-9 操縦技官 「・・・了解しました。 兵装の使用許可を」

観測部隊管制官 「攻撃を許可する」

MQ-9 操縦技官 「了解」

MQ-9 操縦技官は手元のコントロールパネルにあるAGM-114P ヘルファイア？ミサイルのセーフティーを解除しレーザー誘導装置の電源を入れた。

モノクロで画面に表示された緑色のHUD上で近赤外線レーザーが感染者達の群れの中心部に照射された。

MQ-9 操縦技官 「目標ロック完了！ ヘルファイア対戦車ミサイル発射！！」

その宣言と共に発射トリガーを引いた。

固体推進ロケットに引火して目標まで数秒で到達し目標地点の赤外線映像がHEAT弾頭の炸裂した膨大な熱により一瞬映像が見えなくなり画像が復帰した時には、着弾点を中心とするクレーターが出来ていた。

俺 《目標へのCAS命中を確認。》

MQ-9 操縦技官 《了解。》

15:05

Side MQ-9 操縦技官

ヘルファイアを発射した後に僕は、自分がやったことに対する実感があまり持てずにいた。

「すげえ命中したじゃねーか。よくやったな！」と同僚が言ったが、訓練の時にあった高揚感も、そして罪悪感も感じなかった。

僕は、本当は航空自衛隊に入隊してF15-Jのパイロットを目指

していたはずだったのに・・・

観測部隊管制官 「よくやった。このまま任務を続行しろ」

この言葉で過去のことを考えていた頭が急激に冴えてきた。

MQ-9 操縦技官 「了解」そして僕は、車両のエスコートを再開した。

Side out

― 基地 ―

15:32

周辺に何も無い見晴らしの良い高台の坂を上りきったところで目的地が見えて来た。

俺 「お、見えて来たぞ。ようやく着いた」

秀夫 「うん？ おおようやくかw ここまで来るのに結構時間が掛かったなwww」

守衛が居るだけの筈の正面ゲートが、守衛室の屋根に土嚢を積み上げてその上に重機関銃を設置してあり常にこちらへと照準してきている。

普段の職場では無く高度に武装した前哨作戦基地へと変化していた。

ゲート前のバリケードで停止させられて守衛室の中からM4A1を構えた警備兵が出て来た。

警備兵 「IDカードの提示をお願いします。」

そう言われて俺は、首に掛けてあるIDカードを出した。

それを受け取った警備兵は、IDを確認しそれに乗っている写真と見比べたのちカードを返ってきて「ご苦労様です。」と声を掛けながら敬礼をしてきたのでこちらも敬礼を返しながら彼の同僚が開けたゲートを通過していった。

S i d e 中国首脳陣（前書き）

注…省略がとも多いです。

Side 中国首脳陣

— 中国 中国共産党中央軍事委員会 —
11/03/29 02:50

副主席 「日本国内で非常事態宣言が発令されたようだが、この時間にわざわざ呼び出された理由は何だ？」

上級士官 「こちらが日本のニュースの映像です。」
そう言いながら上級士官は、部屋に置いてあるテレビの電源を入れて前日の映像を流した。

（ニュース映像）

アナウンサー 「全国の皆さん、おはようございます。〈中略〉
本日のニュースはこちら！」 そこに映し出されていた前日のニュースは、日本での朝によく見るありふれた映像だった。

アナウンサー 「え、政治経済のニュースです。」

「作者の文章力の無さにて省略（・・・いつものニュースなので必要無いよね？ え必要？）」

アナウンサー 「昨日——航空の旅客機が墜落した事故で救助に当たっていたレスキュー隊が一日経っても本部への連絡が無い状態が続いている模様です。只今封鎖されている墜落現場の規制線から中継が繋がっています。」

数秒の静寂の後現地への中継が繋がった。

レポーター 「こちらは墜落現場から約1Km離れた規制線です。
現在こちらでも情報に進展はなく、昨日墜落した——航空の旅客

機の乗員・乗客の救助に当たっていた筈のレスキュー隊が一日以上たっても連絡が無いという事だけが分かっています。」

画面の右上に表示されているテロップは、『——航空旅客機墜落事故 レスキュー隊失踪の謎！』とゴシップ誌のようなタイトルが出ている。

副主席 「で？ 確かに我が国から飛び立った旅客機だが何かそれ以外に問題があるのか？」
上級士官 「こちらの画面を見て下さい」

(Ich スレッド)

No. Name 本文

1 自称記者 臨時ニュースをお伝えします。 東京都内で通行人に突然噛み付き噛み付かれた人も他の人に噛み付いた模様です。

2 視聴者 な、何だってー 早く逃げなきゃー

3 名無しさん でかい釣り針だなおいw

4 自称記者 ホントだって！ なんか外から音がするから外を見たら歩行者に突然噛み付いているのどころを見たんだよ！！

5 名無しさん 妄想乙www

6 視聴者 そんな訳無いだろwww ちょっとコンビ二行ってくる。

7 名無しさん 行つてらゝ

(省略)

3 5 視聴者 はあはあ、死ぬかと思った。

3 6 名無しさん どうした？まさかそんなに焦つてこのスレの続きが読みたかつたのかw

3 7 視聴者 いや、1が正しかった！

3 8 名無しさん はいはい乙乙w

4 0 視聴者 コンビニに行つたら行く途中で拳動不審な奴がいたんだが明らかに変だったから避けていったんだ。で、コンビニから帰つてくるときにそいつが他の通行人に噛み付いて・
・噛み付かれた奴も急にぐったりとしてそれから俺の方にふらつきながらも歩いて来たんだ！！

4 1 自称記者 噛み付かれるまでならおれも見だが、仲間入りするって本当か！？

4 2 名無しさん 共謀乙w

上級士官 「これと似たようなことが他のスレッドで何件も報告されていて、これが原因で首都機能が麻痺したのではないかと思われます。」

副主席 「だから我が国と何の関係が！」

国防部長 「我々人民解放軍のある機関で開発されていたある薬品を研究者が持ち出し、旅客機に搭乗してブラックマーケットに販売しようとしたのですが機内で拡散して墜落↓パンデミックかと。」

副主席 「パンデミック!? 何を作っていたのだ!？」

国防部長 「そんな事よりも、この事実が世界に広まったらこの国もあなたの地位も（・・・）大変なことになりますよ!」

副主席 「ど、どうすればいいのだ!? 何かいい案は無いのか!？」

国防部長 「我が国の得意な隠蔽工作をすればいいのでは?」

これが、戦争のきっかけになるとは副主席達は、思ってもいなかった。

S i d e アメリカ合衆国（前書き）

上層部の話は短くなる傾向がある・・・

Side アメリカ合衆国

— アメリカ合衆国 国防総省ペンタゴン —
11/29 15:00

会議室のプロジェクトの前に、国防総省（Department of Defense 略称：DoD）・国土安全保障省（Department of Homeland Security 略称：DHS）の職員が集まりこれから始まる重要な会議で話す内容について議論をしていた。

職員たちが座っている椅子の後ろから最先端の生体認識システムによるドアロックの解除音とともに、国防長官とアメリカ合衆国大統領が入室してきて日本との安全保障に関する会議が始まった。

DoD職員 「日本政府による非常事態宣言発令の後、約13分で日本政府との交信が途絶えました。首都東京の政治中枢機能の麻痺が原因とみられる通信障害で沖縄に駐屯している部隊以外との連絡が全くとれない状況にあります。更に・・・」 続きを大統領にその職員が話そうとしたときに、DHS職員が続きを話し出した。

DHS職員 「えー日本国内で起きているこの混乱の原因は中国の人民解放軍が開発していた薬品が原因と見られます。この薬品はどちらかというと生物兵器としての側面が強く本来の目的である強化兵を作り出す為のものとは大きく異なっています。我々が得た情報によると、本来であればこの薬品を製作した研究者が我が国に渡航してきてテロ組織に販売しようとしていたことが分かっています。但しこの研究員が売ろうとしていたテロ組織は我々が使用している架空のテロ組織でしたのでその点は、安心してくださ

い」

大統領 「その薬品についての他の情報は？」

大統領のその発言とともに会議室内の空気が一気に重いものに変質した。

DOD職員 「スクリーンを見てください」

スクリーンに映し出されていたのは、偵察衛星からの赤外線画像とどこかの店の監視カメラの映像だった。

大統領 「なんだねこれは？」

DHS職員 「そのまま監視カメラの映像を見ていてください。

入手するの大変だったんですから」

スクリーンに映し出されている監視カメラの映像

一組の男女が、カメラの前を走って過ぎ去っていきその直後に、虚ろな瞳で夢遊病患者のようにふらつきながら進んでいく感染者の大群が映し出されそれと同時に監視カメラにアクセスしていたのがカメラが旋回し始め男女がしっかりと写る角度に修正された。

男性の方が、すぐそばの工事現場で入手したと見られる鉄パイプで感染者に殴りかかったが3体倒した直後に首に噛み付かれ絶命した。それを見ていた女性は、ショックで呆然としていて正常な判断ができない状態で、恋人だったと見られる男が『感染』して立ち上がった。

たのを見て思わず駆け寄った。

そして恋人だった男に首元を噛み付かれ絶望しながら死んでいった。

長い沈黙の後に大統領が「・・・これが、これがあの薬品の効果なのか・・・」と呟いた。

大統領 「・・・他に生存者は誰がいるのか？」

DOD職員 「赤外線映像で確認したところ、東京は感染者達の町となっていてどんどん勢力圏を拡大しています。・・・ん？！映像のここを見てください！！」

職員が指を指した箇所には、驚くほど短時間で構築された防衛陣地が築かれていた。

大統領 「生存者が残っているのかもしれない！ 今すぐ海兵隊を派遣するんだ！」

国防長官 「許容しかねます！ あの状態のところに部下達を派遣するなど危険すぎます！！」

大統領 「・・・では、各地にいるアメリカ国民はどうなる？

それと国に『内外のあらゆる敵を倒す』と誓いを立て国に貢献してきた者達は！？」

国防長官 「・・・」

アメリカ合衆国大統領の指令を受けたことによりアメリカ合衆国海

兵隊は沖縄の駐屯地から移動を開始した。

多大な犠牲が出た激戦の引き金になるとは思いもよらずに・・・

エンゲージ

― 基地敷地内 ―

11/30 03:00

基地の建物外周部デッキを歩きながら俺は呟いた。

俺 「眠い」

「奇遇だな俺もだよw」と隣を歩いていた秀夫が返してきた。

秀夫 「何だってこんな時間に呼び出されないといけないんだよw」

秀夫のいう通りまだ外は暗闇に包まれている。

俺 「こんな時間に呼び出されるんだからよほどの緊急事態だろう」

秀夫 「今以上に重大な問題って何があるって？」

俺 「例えば中国軍が攻めてくるとか・・・」

秀夫 「・・・おい馬鹿やめろ、それはフラグだ」

黒いインクを零したような空を見上げながら「もう冬か・・・また一年が終わるのか」と呟きながら建物の中に入っていた。

― 基地内ブリーフィングルーム ―

03:02

部屋に入ると普段はただの会議室だった場所が、各種通信装置や地図・兵站の情報などが、ブリーフィングルーム内を埋め尽くしていた。

書類の雪崩に巻き込まれて埋もれている男（司令官）を引きずり出しながら「で、こんな早くに呼び出した理由は何だ？」と聞いた。

ちなみにこの男の名前は、『高木 信夫』で年齢27歳と司令官にしてはかなり若い、企業の創設当時から主人公達といった最古参である。

秀夫 「眠いんですけど」

高木 「入室していきなりその態度かよw 話を聞けw」

秀夫 「だが断る。」

俺 「・・・」↑空気になっている主人公

高木 「で、呼び出した理由だが自衛官に誰か知り合いはいるか？」

俺 「ということは自衛隊駐屯地と連絡はついたのか？ 特殊作戦群の部隊長なら知ってるが・・・」

高木 「連絡先ここに書いておいて」 知らなかったのかよ・・・

テーブルの上に置いてある資料に目を通しながら「まさか、人民解放軍が動き出したか？」と呟くと、

高木 「理解が早くて助かる。 中央モニターを見てくれ」

このブリーフィングルームには、モニターが3つあり中央のモニターには、多数の揚陸艦が赤外線で映し出されていた。

秀夫 「おいおい、これじゃまるで本当に日本と戦争をするみたいじゃないか・・・」

俺 「まるで戦争ではない。これは戦争だ」

高木 「戦争か・・・ お、自衛隊と繋がった」 今まで自分だけで通信装置を弄っていたものの操作方法がよく分からなかったらしく机の上にマニュアルが散らばっている。

自衛官 《此方、陸上自衛隊 中央即応集団 特殊作戦群です。

只今、国家非常事態宣言発令中の為そちらの通信コードの提示をお願いします。》

高木 《通信コード H o t e l 2 D e l t a 4》

自衛官 《っ！ 了解しました。 回線を開きます。》

―― 中央自動車道 ―

1 2 / 0 1 1 1 : 0 0

S i d e アメリカ合衆国 ストライカー旅団戦闘団 ジョセフ・ハドソン二等軍曹

ハンヴィーに積み込まれている本国のテレビのニュース映像で大統領が『我々アメリカ合衆国は、日本国に対する中国政府の派兵を受けてこれを侵略目的における戦争と捉え日米安全保障条約による軍事的支援を開始する。』と演説している姿が放送されていた。

ジョセフ 「なあ、あとどれぐらいで戦場に到着するんだ？ もう19時間以上もこの乗り心地が劣悪なRWS（遠隔武器操作）操作席に座ってないといけないんだ？」俺は多分、本日5回目の質問をした。

隣の席でC4Iシステムのモニターを見ていたクリス伍長が「あと2時間もすれば有無を言わずに戦場ですよ」と言った。

全面通行止めとなっている高速道路の右車線から出てきた自衛隊の10式戦車が並走しながら《こちら日本国 陸上自衛隊東部方面隊 第一師団です。 貴官等の支援に感謝します。》と通信に割り込んできた。

司令部 《現在の状況は？》

自衛隊 《完全な劣勢です。 各地の自衛隊駐屯地との連絡が取れず人民解放軍が動き出したということも伝わっていない可能性があります。》

ジョセフ 「各地との連絡がつかないってどういうことだよ・・・」

クリス 「感染者が襲撃したんじゃないか？」

ジョセフ 「解説どうも」

司令部 《作戦情報の提供を要請する。》

自衛隊 《了解しました。 敵部隊は、現在八王子市周辺に部隊を展開しており、自衛隊は避難民を収容していたのですが避難民の中から感染者が出て更に追い打ちをかけるように人民解放軍の襲撃で部隊としての機能を完全に失い撤退しました。 12:00より反攻作戦を開始します。》

司令部 《了解した。 C4Iシステムへのアクセス権を要請する。》

クリス 「お、仕事が早い。 もう作戦データが来た」

―― 八王子市近郊 ――

11:58

自衛隊

《反攻作戦開始まであと2分です。》

司令部

《了解した。》

《各自の装備を整えるように各車両に伝える。》

《作戦開始まで30カウント》

《29》

《28》

《27》

《26》

《25》

）

）

《5》

《4》

《3》

《2》

《1》

《反攻作戦を開始する。》

作戦開始の合図と同時にストライカーMGS自走砲から発射された白燐焼夷弾により市街地に展開していた人民解放軍の部隊が白い煙に包まれ、その直後に陸上自衛隊の特科部隊によるFH70-155mm榴弾砲から榴弾が発射されて人民解放軍の主力部隊に多大な損害を与えた。

―― 八王子郊外 ――

同時刻

Side 人民解放軍特殊工作部隊

上層部からの指示では無ければわざわざ日本に来てまで破壊工作をすることは無かったのに命令が来てしまったからには仕方が無い。

兵士 「自衛隊が弱すぎる」

工兵 「そうだよな。 あいつらは腰抜け共か？」

兵士 「だよな。 あの弱さは本当にないぜ あははは」

今回我々に下された命令は、上海から飛び立つて日本に墜落した航空機の破壊？で、何故単なる破壊工作でわざわざ2団（2連隊に相当）も投入したのかが理解できない。

司令官 《工兵部隊もう航空機に爆薬の設置は終わったか？》

工兵 《もう少して完了します。》

司令官 《まだ終わって無いのか！？ 早く終わらせるんだ！！》

兵士 「何の音だ？」

ヒューウウウと風を切り裂く音が聴こえて来たと思っていると炸裂音と共に視界がスモークによってあつという間に奪われた。

兵士 「敵の砲撃だ！ 建物とかに身を隠せ！」

遠くの至る所から砲弾の着弾と炸裂音が聞こえてくる。

至近距離に榴弾が着弾したらしくその兵士の右半身の殆どが破片によつて持つて行かれた。

辺り一面に血の海を作りながら周りを見渡すと工兵が駆け寄つてきて何かを言っている。一緒に聴覚も奪われたらしい。

「しっかりしろ！ 死ぬんじゃない同志！！」と右半身の殆どをやられた兵士を引きずったが既に死んでいた。

工兵 「クソッ 今回の作戦は完璧じゃなかったのか！？ ほとんどん同志が倒れていく・・・」

司令部 《今すぐ『あれ』を起爆させる！ 起爆させて帰還したら英雄だ。》

工兵 （俺は…英雄になる！） そう思いながら男は、起爆装置に手を伸ばした。

Side Out

―― 八王子市近郊 ―

Side アメリカ合衆国 ストライカー旅団戦闘団 ジョセフ・

ハドソン二等軍曹

12:05

砲撃が始まってから5分後、歩兵部隊と自衛隊の部隊と俺が搭乗しているストライカー装甲車は、白煙の中に突入した。

赤外線カメラによって得られたサーマルイメージと現在位置の座標をC4Eシステムによって他の部隊の情報と統合することによってフレンドリーファイアー（友軍誤射）を防止して更に、敵の位置も画面上で共有している。

建物の屋上や、敵の装甲車両を警戒しながら前進していると、前方120mに敵の集団がサーマルイメージで白く映し出された。

ジョセフ 「前方110mに敵歩兵部隊！！」 そう言い終るのと同じ時に俺は、RWS上でMk・19オートマチックグレネードランチャーのトリガーを引いた。

ポンツと気が抜ける音が3回鳴り終るのとはほぼ同時に、発射された直径40mmのM430多目的榴弾が敵歩兵部隊の足元で炸裂した。この弾薬は、殺傷範囲が15mと範囲が小さいが、装甲車の装甲も貫くことができる優れた弾薬である。多目的榴弾が足元で炸裂したことにより、着弾地点は死体だけになっていた。

自衛隊 《こちらの担当区画の制圧が完了しました。》
指令部 《了解した。こちらの区画は25%残っている。 オーバー》

他の部隊でも順調に掃討が進んだらしい。

・・・それは、一瞬の出来事だった。

墜落現場のそばから何も見えなくなるような強烈な閃光が出て辺り一面を衝撃波が包み込んだのは・・・

閃光（前書き）

文字数がどんどん少なくなっていく・・・

閃光

―― 八王子市近郊 ――

Side アメリカ合衆国 ストライカー旅団戦闘団 ジョセフ・
ハドソン二等軍曹

うつ頭が・・・

キイーンという耳鳴りが酷くストライカー装甲車のエンジン音すら聴こえない。

一体何が起こったんだ!?

確か俺は、あの瞬間もRWSで周辺を警戒していたはず・・・

激しい頭痛と共にあの瞬間に起こったことを思い出した。

1分24秒前

自衛隊 《こちらの担当区画の制圧が完了しました。》

指令部 《了解した。 こちらの区画は25%残っている。

オーバー》

と言う通信が聞えたのと共にサーマルイメージが、白一色になった。そのとき俺は、赤外線投光器を照射されたのだと思い込み、通常のカメラ映像に切り替え絶句した。

C4Iの作戦区域地図上で航空機墜落現場と表示されている地点から高度200～300mの地点で空が歪んだと思ったら火の玉となりそれが急激に膨張してその際に生じたソニックブーム（衝撃波）によって市街地のビルの窓ガラスが一斉に割れていくのと爆音が聞

えてくると意識を失うのは同時だった・・・

ジョセフ 「クリス！ 無事か！？ 無事なら返事をしろ！」

なぜクリスだけかと言うと俺とクリス以外の乗員は降車していたため生存を確認することは出来ない為で他意はない。

クリス 「アア？ すまないがもう少し大きな声で言ってくれ。耳鳴りが酷くて何て言ってるのかがまったく分かん。後、何が起こったのか説明してくれ」・・・口は悪くなっているが一応無事のようなのだ。

あの瞬間に俺が見たものについて聞きながらストライカー装甲車のセルフチェックをしていたクリスが悪態を付いた。

クリス 「クソッ」

ジョセフ 「どうしたんだ」

クリス 「油圧機構がいかれていやがる！ 取り敢えず動くかどうかやっでは見るが・・・」

それを聞くと俺は、座席後方のガンラックに固定していたM16A4を掴み取り上部ハッチを開けて外に飛び降りた。

着地してから見た光景に自分の頭の処理が追いつかなかった。

よく見かける一般的なガラス張りのビルは窓ガラスが全部吹き飛び、市街は土煙に包まれていた。

そして先程まで戦闘をしていた筈の歩兵が、誰一人として立っていないかった。

思考機能が回復した俺は、一番近くに倒れていた友軍兵士のそばに駆け寄った。目立った外傷は無かったのだが心拍を確認したらところ完全に停止しており、他の兵士達も同じ状態だった。

ジョセフ 「一体どうなったって言うんだよ!!」

司令部 《ストライカー旅団戦闘団に所属する各兵員に告ぐ。

先程の爆発は、燃料気化爆弾の模様。爆発によって人民解放軍は壊滅状態にある。但し、我が部隊も多大な被害を受けた。》

司令部 《自衛隊側の被害は?》

自衛隊 《殆どの部隊と通信が取れません。一体何があったんですか!?!》

司令部 《畜生! 比較的簡単な反攻作戦でこんなことになるなんて・・・》

《脱出用ヘリを要請する!! あと20分以内に来てくれ!》

司令部 《生存しているストライカー旅団戦闘団の全隊員に告ぐ 現在時刻を持って現作戦を破棄する。 脱出用ヘリが来るまで死傷者の回収等を行ってくれ。》

クリス 「おいおいマジか? こんな爆発じゃ殆ど死んだだろ・・・ クソツタレ・・・」

ジョセフ 「誰か生きていたら返事をしてくれ・・・」

周りの死体を一カ所に運びながら半ば泣きかけている声で呟いた。

すると窓ガラスが全て割れたビルから人がゆっくりとした足取りで出て来た。

アメリカ兵 「その人! 今すぐ此方に来てください! さあ早

くー！」ビルから出て来た人影はだんだん歩くペースが速くなっていってその兵士が伸ばした腕に噛み付いた。

「ギャア 噛み付きやがった！ 何だこいつ！？」

咬まれた兵士は、レッグホルスターから拳銃を抜くとその人の形をした何かに対して発砲した。

銃口から飛び出した弾丸は、心臓を撃ち抜き普通の人間だったら倒れている筈だった。

・・・そう、感染者で無ければ。

感染者に発砲した兵士は、抵抗をしたが予想以上の腕力で引き離すことが出来ずそのまま喉を食い千切られた。

ジョセフ 「は？・・・なにが、何が起こったんだ？」 目の前で起こったことに対して今度こそ処理が追いつかなくなった。啞然しているとクリスが俺の腕を掴んで「しっかりしろ！ 奴らに喰われるぞ！」と言いながら半ば引きずられる形でストライカーの押し込まれた。

クリス 《司令部、こちらセイバー2-5 至急応答してくれ！》

司令部 《どうした？》
クリス 《目の前でチャーリー分隊の奴が噛み殺された！》

司令部 《どういう事だ？ もう少し詳しく説明をしてくれ。》
クリス 《感染者だ！ それもかなりの数だ！！》
司令部 《何と言う事だ・・・ アメリカ軍・自衛隊全部隊へ、直ちに活動可能な部隊を一カ所に集結させて防衛戦を張るんだ！》

自衛隊 《え？ 何が・・・》

司令部 《感染者だ！ それもかなりの数だ！ 各部隊、作戦
区画D - 6へ急行して脱出用ヘリが来るまで持ちこたえてくれ。》

ジョセフ 「感染者？ さっきのあれか？ あんなのに銃弾が効
くのか？」

クリス 「やるしかないだろ・・・」

―― 作戦区画D - 3 ―
12:37

反攻作戦に参加して区画D - 3に集結した部隊の車両台数は30両
あったものの、生存者は数えることが出来る程度しかいなかった。
脱出ヘリが到着するまでの間この地点を防衛しなければ俺達は、こ
こで死ぬことになる。

そんなラストを俺は望んでない。
ここで何としても生き残ってやる。

そして、感染者の大群がやってきた。

墜落（前書き）

研修でしばらく執筆することが出来ませんでした。

墜落

―― 作戦区画D-3 ―

Side アメリカ合衆国 ストライカー旅団戦闘団 ジョセフ・
ハドソン二等軍曹

12:40

先程の感染者達の撃退の際にストライカーに搭載していた弾薬類の殆どを使い切ってしまった為に今はM16A4を使って奴らの数を減らしている。

自衛官 「何故だ！？ 連中には弾丸が効かないのか！？」すぐ隣で89式小銃を発砲していた空挺部隊員が、弾倉に入っている最後の弾薬を撃ち切りながら怒鳴った。

ジョセフ 「頭部だ！ 頭部を狙え！！ 奴らにも、弾丸は通用するぞ！ その人！ これを使え！！」所持していた弾薬をすべて使い果たした自衛官に自分が先程まで使用していたライフルとマガジンを投げ渡した。

自衛官 「すまない」

ジョセフ 「気にするな！ それより生きて帰ったら一杯やらないか？」 そう言いながら俺は、MK48 Mod0 の機関部上面を開き、200発ベルトリンクに繋がられている7.62×51mm弾を装填した。

自衛官 「生きて帰れたらな！」 それと共に俺は、トリガーを引き絞った。

軽機関銃を扱う際のコツは、狙撃銃の様に点で狙うのではなく、銃口を左右に移動させて面で制圧することだ。

MK48 Mod0 の連射速度は一分間辺り725発ばら撒くことが出来るので、今みたいな状況に打ってつけの火器であるが、少しずつ奴らの数に押されて行くのは明白だ。
5分経っただろうか？

弾丸の撃ち過ぎで、銃身が真っ赤になり銃身の交換が必要になっている。

何故ならすでに、3000発以上も連中に向かってばら撒いているからだ。

ジョセフ 「すまないが、銃身の交換が必要だ！ 援護を求む！」
全ての弾薬を撃ち尽くしたストライカー出て来たクリスが、M4A1を構えながら駆け寄ってきた。

背中に背負っているリュックの中から、MK48 Mod0専用の整備キットを手際よく取出してから、耐熱手袋を両手につけて銃身固定部の解除ピンを押して焼けついた銃身を足元に投げ捨ててすぐさま新しい銃身に取り換えた。

最初は、800m程先に居た感染者達の群れだが今では、500m程に迫っている。

このままでは生存者の全滅も間近である。

自衛官 「クソッもうこちらの車両には、弾薬が残っていない！

あんたらは残っているか？」

クリス 「7.62mmならだいたいぶ残っているが、5.56mmはほとんど残っていない！」 叫びながら、OD色の弾薬箱を持って駆け寄った。

司令部 《只今其方の後方240m地点に輸送ヘリ部隊が到着した。 防衛戦の戦闘の部隊は、後退して来い。》

ジョセフ 《此方、ジョセフ・ハドソン二等軍曹です。 もう弾薬

の残りがありません!!」

司令部 《輸送ヘリ部隊の連中に弾薬を後方に降下してもらった。
それを使え。》

ジョセフ 《了解! ボス》

それだけ聞いて、防衛線の先頭に居た俺らは、後退を開始した。

空を見上げると、硝煙の白い煙が立ち込めてはいるものの青空が広がっていた。

空気を切り裂くブラックホークのローター音が聞こえて、ドアから、弾薬類が大量に入った箱が投下されてパラシュートで減速しながら、別の部隊が焚いていた戦術マーカに見事に衝突した。

酒を飲む約束をした自衛官が弾薬箱に駆け寄って、他の部隊員にも配った。

ジョセフ 《司令部、近接航空支援を要請できるか?》

司令部 《近接航空支援を許可する。》

《攻撃ヘリ部隊、聴こえるか?》

AH-1乗員 《感度良好。 何処の地点にCASをすればいいんだ?》

ジョセフ 《戦術マーカを焚いてある地点から北に450mの地点に最適な火力を頼む》

AH-1乗員 《了解!! 攻撃を開始する!》

通信を終えて空を見上げるとAH-1が空を切り裂くローター音と共に過ぎ去り目標の50m手前でホバリングをしてウェポンベイに搭載していたハイドラ70ロケットポッドを使用して感染者達を蹴散らしているが、19発入りのポッドはすぐに残弾が0になり30mm M230チェンガンに切り替えた。

70mmのロケット推進弾に比べると口径の差で脆弱な装備に聞こえるが、M789 HEDP（High-Explosive Dual Purpose）を毎分650発で発射することができるので凶悪な装備である。

因みにM789 HEDP弾は、均質圧延装甲（日本の74式戦車の装甲板などに採用された）を正面から2500m先の距離で50mmの貫徹能力を誇り、更に、多目的榴弾なので爆発の際の破片によつて半径4mの範囲での殺傷能力を持つ。

自衛官 「初めてこんな戦闘を体験したが、ここまで激しいものなのか・・・」

ジョセフ 「いや、こんな戦闘は、俺達も初めてだ。なあクリス」

クリス 「ああ。ただ、いくら最適な火力って言ってもあれはやりすぎじゃね？」

ジョセフ 「気にするな」

AH-1自体は、ベトナム戦争から使用されている機体だが、幾度となく改修されて現在でも使用でき最新版モデルは、AH-1バイパーと呼ばれている。

先程からチェーガンから放たれている多目的榴弾が、着弾と共に周辺の地形ごと抉り取って感染者達を跡形もなく消し去っている。

AH-1乗員 《司令部聞こえるか？ 弾薬がそろそろ底を尽きる。補給の為一時帰投する。》

司令部 《了解した。混成部隊はそのままその地点を防衛してくれ。君達が1分時間を稼ぐ間に、15人の命が救われている。最大の努力をしてくれ。》

ジョセフ 《そろそろ限界なんだが・・・ まあ耐えてみせるさ。》

輸送部隊 《此方、ホテル3-1 現在、其方の位置に向かっていく。耐えきつてくれ。》

それだけ言つと無線を一方的に切断された。

遂に、MK48 Mod0本体から、煙が昇りだしたので俺もM4A1に持ち替えて応戦した。

30発入り弾倉は、軽機関銃の200発入りの弾奏と比べると心細いが、気にはしてはいられない。

マウントレールに搭載されていたEotech製のホロサイトの照準の明るさを最大まで上げてサイティングしやすくしてから、ライフルの安全装置のポジションをセミオートに変更して弾薬を節約しながら確実に・・・とまでは行かないが順調に数を減らしていた。

32分後

殆どの部隊の撤退が完了して残るは、自衛官と俺たちの混成分隊だけとなった。

俺達を回収してくれる最後のヘリが向かってきた。

輸送部隊 《あんたらで最後だ。もう1〜2分で到着するから持ちこたえてくれ。》

ジョセフ 《了解！！ ただし出来るだけ早く頼む！》

輸送部隊 《努力はするw》

その直後に、耳障りなアラート音がインカムに入った。

輸送部隊 《レーダー照射！？ クソッ、対空ミサイルだ！ 回避する！ フレア展開！！》

それと共に、機体下部に取り付けられていたフレア射出装置から、オレンジ色的高温で燃えていて大量の煙を放ちながらフレアが放出

され、操縦手が機体をバレルロールさせて携行式対空ミサイルを回避しようと試みたが、人民解放軍の特殊部隊が使用したQW-4携帯対空ミサイルは、赤外線画像誘導方式でフレアがあまり効果が無い為にテールローターに被弾した。

輸送部隊 《メーデー メーデー 此方、ホテル3-1テールローターに被弾した！！ 当機は墜落する！ 繰り返す、此方、ホテル3-1テールローターに被弾した！！ 当機は墜落する！！》

ジョセフ 「おい、嘘だろ・・・」

クリス 「クソッ、いったいどうしろって!？」

自衛官 「・・・」

最後の脱出便が、目の前で撃墜されて絶望感で空を見上げると、そのヘリが、こちらに向かってきりもみ回転をしながら落下してきた。

ジョセフ 「こっちに向かって来てるぞ！ 逃げる！！」

周りの連中が「？」と空を見上げて、殆どの奴が驚愕の表情を浮かべ、直後に全力で駆け出した。

2秒後、激しい衝撃音と共に、UH-60が墜落した。

派手に墜落したブラックホークに兵士が駆け寄ると、操縦手しか搭乗していなかったようでコクピット以外には誰もいなかった。

コクピットの中は、誰だか解らない程、損壊した遺体があった・・・と言う訳では無く、右手親指を立てて生存をアピールしているパイロットがいた。

ジョセフ 「誰がリアル『ブラックホークダウン』をやれと言ったんだよw」

操縦手 「んなこと言われてもwww」

司令部 《操縦手は生きていたのか!? 一体どうなんだ!?!》

操縦手 《頭を強く打っただけだ。 問題ない。》

クリス 《「で、一体これからどうするんだ?」》

司令部

《安全な場所に退避しておいてくれ。》

ジョセフ

《安全な場所なんてないだろ・・・多分。》

司令部

《ビルの屋上とか？》

クリス

《取り敢えず了解した。》

退避（前書き）

作者（現実から）

退避

―― ストライカー歩兵戦闘車内 ――

Side アメリカ合衆国 ストライカー旅団戦闘団 ジョセフ・
ハドソン二等軍曹

13:15

司令部との通信を終えた俺達は、残存部隊で部隊を再編成して八王子市中心部でヘリポートがある高層ビルへと向かった。

ジョセフ 「ジェームス、上空から見た街の様子はどうなったか？」

ジェームス 「まさに地獄絵図つてところだったな」（撃墜されたヘリの操縦士ことジェームス・マクシミリアン二等軍曹）

クリス 「そんなに酷かったのか・・・」 ジェームスの怪我の手当てをしながら呟いた。

途中で残り僅かな砲弾を感染者達に惜しげも無く使い道を切り開きながら前進した。

高橋 「お、見えて来た！ あそこですよ！！」（先程飲む約束をした自衛官こと高橋 雪輝）

指を指している方向を見ると、全面ガラス張りだったであろう高層ビルが見えた。

高橋 「あのビルのBARから見る夜景はかなり綺麗だったんですけどね・・・」

ジョセフ 《A・B車に搭乗している者は、1F～20Fまでの確保、C車に搭乗して居る俺達は、ヘリポートの制圧。以上だ。》

A・B車 《了解！！》

― ホテル（緊急回収地点） ―

13：40

こんな異常事態が起きる前は、ホテルに来た宿泊客を受け入れる為であつた乗降スペースに戦闘車両を停めて車両内にあるブラックボックス（C4システム等の暗号化情報が入っている）のデータを破壊して、機動砲システム・車両自体を第三者に渡つた際に使えなくなるように少量のRDX爆薬を仕掛けてホテル内部へと突入した。

ジョセフ 「こいつは・・・酷いな・・・」

ホテルのエントランスホール内部は、生存者と感染者が戦つた痕跡が至る所に残されていた。

ホール一面に広がっている血・肉片・遺体・・・etc

B車に搭乗していた実践を経験したことのない自衛官がこの惨状を目にして、胃の中に残っていた物を全て吐き出した。

非常階段の方へ足を進めると、突然カウンターに設置されていた客室と通じている電話が鳴りだし、驚いた俺は、SCAR-Lの銃口をとっさに向けた。

クリス 「こんな時にルームサービスの依頼か？」

高橋 「いや、生存者が助けを求めているのかもしれない取り敢えず出してみるべきだ」

受話器に手を伸し電話に出ると、「今、車で来た方々ですよね！？ たつ、助けて下さい！！」電話を掛けて来た女性の奥の方から、「電話ごと持って早くこっちに来て手伝ってくれ！！ ドアが破られてしまう！！」そう叫ぶ男の声が聞こえた。

どうやらかなりまずい状況らしい。

クリスにメモを要求してポーチからペンを取り出しながら、雪輝に代わった。

「今、助けに行きますから何号室ですか!? 他に生存者がいる部屋はありますか!?」と聞くと、先程の男が、

「29階の2932号室だ!! 1140号室と1430号室にはまだ生存者がいる! 今、俺が居る部屋には、友人4人で他の部屋には、1人らしい。あいつらが事実を言っていたらだが・・・」と答えた。

生存者の情報を書いたメモをクリスに渡して、生存者の分の拳銃を高橋と取りに行った。

クリス 《此方サブリーダー、各班聴こえるか?》

A・B班 《《感度良好。》》

クリス 《生存者の情報だ、1140号室と1430号室にまだ生存者がいるらしい。ついでに回収してきてくれ。》

A・B班 《《了解。》》

拳銃を回収して20Fまでは、他の班に任せ4人で階段を全力で昇り息を切らせながらも20Fに着いた。

ジェームスに後方の警戒をしてもらいながら、自分を含めた3人で前と左右の警戒をしながら「生存者の方いたら返事をしてください」とドアのロックの有無を気にせず訪ねて回り、ロックの外れている部屋があつた場合俺を先頭にして屈んだ状態でドアノブに左手を掛けて、開けるとともにクリスが正面の安全を確認をして雪輝が突入してクローゼットや風呂場の安全を確保していった。

それを1フロア辺り3〜4回繰り返し返して29Fにたどり着いた。

電話の男が言っていたように部屋の前には大量の感染者達が集まっていた。

3人に俺が発砲したら撃つようにと言う意味のハンドサインを出してアンダーバレルショットガンの中に、フレシエツト弾を装填してSCAR-Lの引き金を引いた。

銃口に取り付けられているサプレッサーによって抑圧された銃声が廊下に連続して響いた。

薬莢が落下したのと同時にそれぞれが持つ銃が火を噴いた。

アンダーバレルショットガンの引き金を引き、フレシエツトが飛翔していった。

タングステン製の矢 高初速で貫通力にとっても優れるが、風に流されやすい。 閉所では、防弾チョッキを着ていようが壊滅的な損害を相手に与えられる点は、通常の12ゲージ弾と同じ。

5.56mm弾の貫通力も高いが、フレシエツト弾の場合、更に貫通力が高いため複数体の感染者の頭蓋骨を貫通してから、奥の非常口のドアも貫通した。

雪輝は89式小銃を発砲していたが、途中で排莢不良を起こしてしまったので、9mm拳銃若しくは、桜sigことp220を感染者に向かって頭部にダブルタップで射撃を継続している。

89式小銃は国産の小銃だが、規制ガス圧の調整をすれば（微調整程度）問題なくSS190弾を使用できる。・・・
[△]良が起きたのは弾薬の精度が悪いのが混入していた為
[△]排莢不

40秒ほどで感染者達は、掃討された。
生き返る可能性

まだ反応があるがある感染者には、頭部に一発ずつ撃ち込んでいき安全を確保した。

発砲する度に室内から悲鳴が上がっていた。

2932号室のドアは、感染者によつて歪な形に変形して開きそうにも無い。

雪輝 「内側から開けられますか!？」

男 「無理だ! ドアノブが変な方向を向いていて開けられそうに無い!！」

雪輝 「ドアを爆破するので出来るだけ離れて下さい!」

男 「爆破!？ 危ないだろ! もっと安全な方法は無いのか!？」

雪輝 「最善の方法がそれです! 速く離れてしゃがんだ状態で耳を塞いで口を開けていて下さい!！」

しゃがんだ状態で耳を塞いで口を開けておくというのは、爆発で鼓膜が破けたりするのを防ぐため。

俺が、爆薬をドアの蝶番のところにRDX爆薬を仕掛けて雪輝に合図を出した。

雪輝 「3」

「2」

「1」

「発破!！」この合図と同時に俺は、起爆トリガーを引いた。蝶番を破壊されたドアをクリスが蹴破り俺を先頭にして突入した。言われたとおりにながんでいた女は、問題無かったがドアの付近で指示を無視してドアの近くに立っていた男は、気絶していた。制服から見るに女子大生だろう。

雪輝 「大丈夫ですか?」

女子大生 「大丈夫です。 私よりもそこで倒れている父は?」

ジョセフ 「安心してください。 問題ありません」

女子大生 「自衛隊と米軍!？ 随分と早い救助ですね」

雪輝 「お名前は?」

女子大生 「菅原 奏です。 東京大学2年生です。」

雪輝 「自分は、高橋 雪輝2等陸曹でこちらの方が、ジョセフ・ハドソン二等軍曹で、こちらの方がジェームス・マクシミリアン二等軍曹で、こちらの方がクリス伍長です。」

手短に現在の状況と拳銃の使い方を説明していると彼女の父親が軽い脳震盪から復帰した。

菅原（父） 「何でもつと早く来なかったんだ！？ 国民の税金だぞ！！ 私は、政治家なんだぞ！ こんな状況でも統治できる人間が必要だろう！？ グフツ！」

奏は、心底うんざりとした様子で実の父親を見ていたが、雪輝がとった行動に驚いた。

菅原（父）の胸ぐらをつかみ壁に押し付けてナイフを首に押し付けたからだ。

雪輝 「ああそうかい、結局政治家ってやつはみんなこうか。自分の意見押し付けて自分だけが優位に立とうとする！！」

菅原（父） 「貴様！！ そんなことをしてタダで済むと思ってるのか！？ 後で貴様等全員まとめて訴えてやる！！」

雪輝 「あんた等が防衛出動の許可をもつと早く出していれ
ば・・・ あいつ等は死ななくて済んだのに・・・ クソツ！！」

俺は、雪輝が手にしているナイフを取り「そこまでだ」とだけ言うと、雪輝は拘束を緩めてテーブルの方へ行き、89式小銃内部で引っかかった薬莢を先程のナイフで除去して普段の冷静な状態に戻った。

ジョセフ 「一応あんたにも銃を渡しておく」

M1911の簡単な操作方法だけ説明して菅原（父）に渡した。

菅原（父） 「フン！ 最初からそうしていればいいものを」と

言いながら差し出した拳銃を奪い取った。

A 班

《生存者を回収した。直ちにヘリポートに向かう。》

B 班

《此方は、言われた部屋はもう手遅れだった。他の

生存者がいたのでついて来てもらっている。》

C 班

《少し問題があつたがすぐに向かう。》

通信を終えると俺達は、屋上へと向かつて行った。

退避（後書き）

・・・よく居ますよねこういう政治家

ご意見・感想等お待ちしております。

ps .

ルビが振られない・・・（誰か助けてw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0174y/>

銃声の果てに・・・

2011年12月25日17時55分発行